

秋田県文化財調査報告書第359集

東 飛 塚 館 跡

— 主要地方道能代五城目線地方特定道路整備工事(森岳工区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —



秋田県文化財調査報告書第359集

東
飛
塚
館
跡

2
0
0
3
・
3

秋田県教育委員会

2003・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂（しろざか）遺跡
出土の「岩偶」です。

縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

ひがし とび づか たて あと
東 飛 塚 館 跡

— 主要地方道能代五城目線地方特定道路整備工事(森岳工区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2003・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、主要地方道能代五城目線地方特定道路をはじめとする交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、主要地方道能代五城目線地方特定道路建設に先立って、平成12年度と平成13年度に山本町で実施した東飛塚館跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、弥生時代前期の土器埋設遺構などが発見され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました秋田県山本建設事務所、山本町、山本町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

例 言

1. 本報告書は主要地方道能代五城目線地方特定道路整備工事（森岳工区）に係る東飛塚館跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成12・13年度に発掘調査を実施した秋田県山本郡山本町森岳字東飛塚に所在する、東飛塚館跡の調査成果を収めたものである。
3. 発掘調査成果については、すでにその一部が『秋田県埋蔵文化財センター年報20（平成13年度）』および発掘調査資料などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
4. 本書に使用した図は、秋田県山本建設事務所提供の『工事路線計画図』、建設省国土地理院発行の25,000分の1『森岳』である。
5. 遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』2001年度版に拠った。
6. 本書第5章の自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した分析報告である。
7. 発掘調査ならびに本書の刊行にあたって、次の方々や諸機関より御指導、御助言を賜った。
記して、感謝申し上げます。〔敬称略〕
須藤 隆 田中 敏 嶋田 仁 田村征孝
8. 本書の執筆は第1章を石澤宏基が執筆し、それ以外を藤田賢哉が執筆した。編集は藤田が行った。

凡 例

1. 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、種別を問わず検出遺構順に連番としたが、発掘調査と整理作業の過程で欠番としたものもある。遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。
S I・・・竪穴住居跡 S R・・・土器埋設遺構 S K・・・土 坑
S K F・・・フラスコ状土坑 S D・・・溝跡 S N・・・焼土遺構
S W・・・炭窯 S K P・・・柱穴様ピット
2. 土層番号に用いた数字は、基本層序にローマ数字を、遺構土層に算用数字を使用して区別した。

目 次

序	
例言・凡例	
目次	
表・挿図・図版目次	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第2章 遺跡の環境	3
第1節 遺跡の位置と立地	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 遺跡の概観	7
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の経過	8
第4節 整理作業の方法と経過	9
第4章 調査の記録	11
第1節 調査区の地形と層位	11
第2節 検出遺構と出土遺物	11
第3節 遺構外出土遺物	31
第5章 自然科学分析	37
第6章 まとめ	41

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置……………1	第11図	S K F 163・164・212 フラスコ状土坑……………22
第2図	東飛塚館跡周辺の地形区分図……………4	第12図	S D 50溝跡、S N 49・132焼土遺構、 S W 139・207炭窯……………24
第3図	周辺の遺跡……………6	第13図	遺構内出土土器（1）……………26
第4図	グリッド配置図……………10	第14図	遺構内出土土器（2）……………27
第5図	基本層序……………12	第15図	遺構内出土土器（3）……………28
第6図	遺構配置図……………13	第16図	遺構内出土石器（1）……………29
第7図	S I 48竪穴住居跡……………14	第17図	遺構内出土石器（2）……………30
第8図	S R 27・108・110・124 土器埋設遺構……………16	第18図	遺構外出土土器（1）……………33
第9図	S K 24・51・101・102・126・141 土坑……………19	第19図	遺構外出土土器（2）……………34
第10図	S K 158・162・166・173・178・195 土坑……………20	第20図	遺構外出土石器（1）……………35
		第21図	遺構外出土石器（2）……………36

表 目 次

第1表	東飛塚館跡と周辺の遺跡一覧……………5	第6表	遺構外出土土器観察表（2）……………34
第2表	柱穴様ピット一覧……………25	第7表	遺構外出土石器観察表……………36
第3表	遺構内出土土器観察表……………28	第8表	放射性炭素年代測定および 炭化材同定結果……………38
第4表	遺構内出土石器観察表……………30	第9表	リン・カルシウム分析結果……………39
第5表	遺構外出土土器観察表（1）……………33		

図 版 目 次

図版1	遺跡遠景（南西から） 平成13年度調査区全景（北東から）	図版7	S K F 163完掘（北から） S K F 212土層（東から） S D 50土層（西から）
図版2	S I 48完掘（南東から） S R 27検出（東から）	図版8	S R 27出土土器（壺）
図版3	S R 108検出（南から） S R 108土層（南から） S R 108完掘（南から）	図版9	S R 27出土土器（鉢） S R 108出土土器 S R 110出土土器
図版4	S R 110検出（南西から） S R 110土層（南西から） S R 110完掘（南西から）	図版10	S R 124出土土器 遺構内出土土器 遺構内出土石器
図版5	S R 124検出（西から） S R 124土層（西から） S R 124完掘（西から）	図版11	遺構外出土土器（1） 遺構外出土土器（2） 遺構外出土石器
図版6	S K 158土層（南から）		

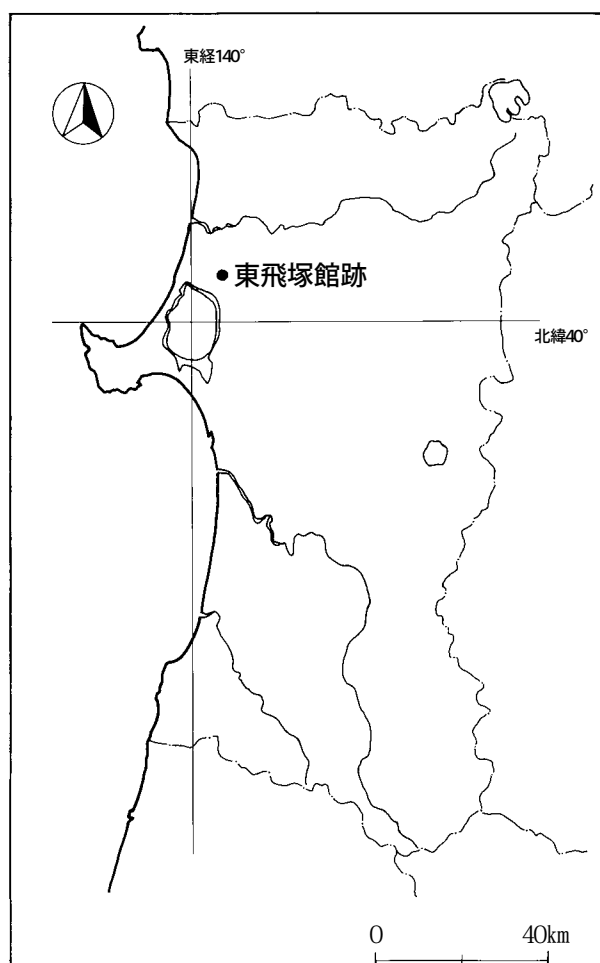
第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

主要地方道能代五城目線は、能代市戸羽田字山下地内を起点とし、南秋田郡五城目町内川黒土字下川原地内を終点とする延長40.386kmの道路である。路線は、起点で国道7号線から分岐し、終点で国道285号線に接続する。また、山本郡山本町の中心街である森岳地区では県道森岳鹿渡線とも接続しており、地域住民にとっては日常生活の交通を支える道路として利用されている。しかし、山本町森岳字東飛塚に係る現道は、幅員が狭隘な上、急勾配・急カーブとなる場所であり、勾配下に森岳バイパスのT字路交差点が位置するため、現在も常時交通量の多い隘路となっている。秋田県山本土木事務所（現秋田県山本建設事務所）は、この区間の安全性と利便性を高める必要から、地方特定道路整備工事（森岳工区）として事業計画を策定した。

本事業の計画路線内には、埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性があったため、秋田県山本土木事務所は、文化財保護法に基づき工事区域における遺跡の確認と対応について秋田県教育委員会に調査と指導を依頼した。これを受けて秋田県教育庁文化課（現教育庁生涯学習課文化財保護室）が平成8年5月に遺跡の分布調査を行ったところ、当遺跡の確認調査が必要なこと、確認調査の結果、遺跡の記録保存が必要な場合は発掘調査を実施すべきであることを回答した。

平成11年12月に、秋田県埋蔵文化財センターが遺跡の確認調査を実施したところ、縄文時代晩期の遺構と遺物が確認されたため、次年度から発掘調査による遺跡の記録保存を行うことが決定された。



第1図 遺跡の位置

第1章 はじめに

第2節 調査要項

- 遺跡名 東飛塚館跡（ひがしとびづかたてあと）
- 遺跡略号 3HTDT
- 遺跡所在地 秋田県山本郡山本町森岳字東飛塚118-1 A外
- 調査期間 平成12年度（第1次調査）：平成12年9月12日～10月6日
平成13年度（第2次調査）：平成13年9月20日～11月8日
- 調査目的 主要地方道能代五城目線地方特定道路整備工事（森岳工区）に係る埋蔵文化財発掘調査
- 調査面積 平成12年度（第1次調査）：1,100㎡
平成13年度（第2次調査）：2,700㎡
- 調査主体者 秋田県教育委員会
- 調査担当者
平成12年度：石澤 宏基（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科学芸主事）
土田 宏（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科非常勤職員）
横山香菜子（秋田県埋蔵文化財センター調査課調査第三科非常勤職員）
平成13年度：藤田 賢哉（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事）
足利 直哉（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）
井上 理子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）
- 総務担当者
平成12年度：佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
八文字 隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
平成13年度：土橋 謙一（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）
- 調査協力機関 秋田県山本建設事務所 山本町教育委員会

《参考文献》

- 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』1976（昭和51）年
- 山本町『山本町史』1979（昭和54）年
- 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年
- 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』1990（平成2）年
- 秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集 2000（平成12）年
- 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（山本地区版）』2002（平成14）年

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

山本郡山本町は八郎瀧残存湖の北東にあり、東飛塚館跡は町内J R奥羽本線森岳駅の東方約1 kmに位置する。秋田県北部の地形は、東から西へ山地・丘陵地・台地・低地の地形配列をなしており、森岳地区の地形においては、東から西へ房住山山地、谷地の沢丘陵地、桧山・山本丘陵地、豊岡台地、志戸橋野台地、成合台地、浅内低地、日本海砂丘地の起伏をみることができる。本遺跡の立地する豊岡台地は下末吉面相当面とされ、遺跡周辺の土壌統は黒ボク土の野々村統、表層地質は瀧西層である。この台地は八郎瀧残存湖に流れる三種川と支流の金光寺川沿いに展開する三種川低地に張り出しており、調査区からは南西側に三種川と周辺に広がる低地を間近に望むことが出来る。

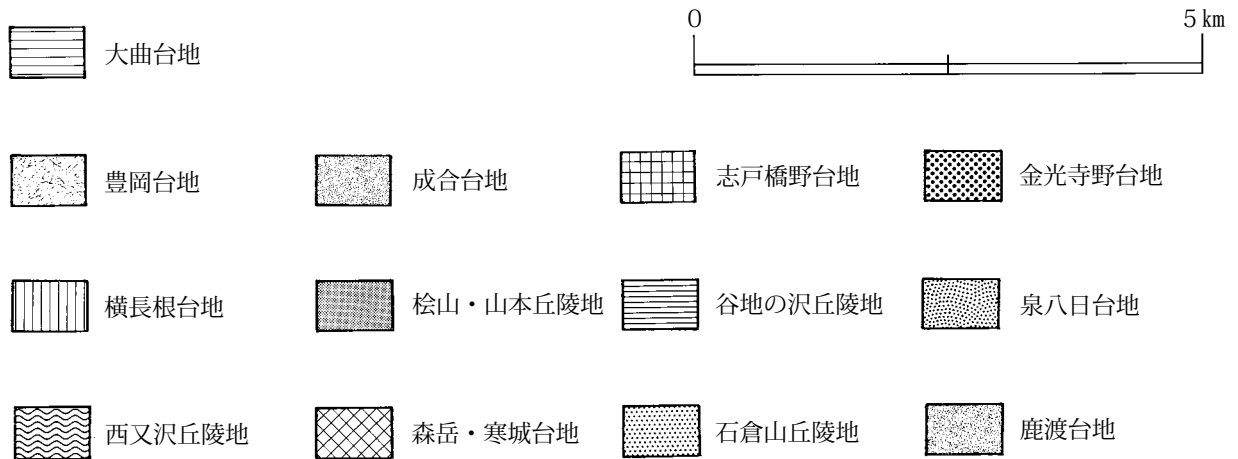
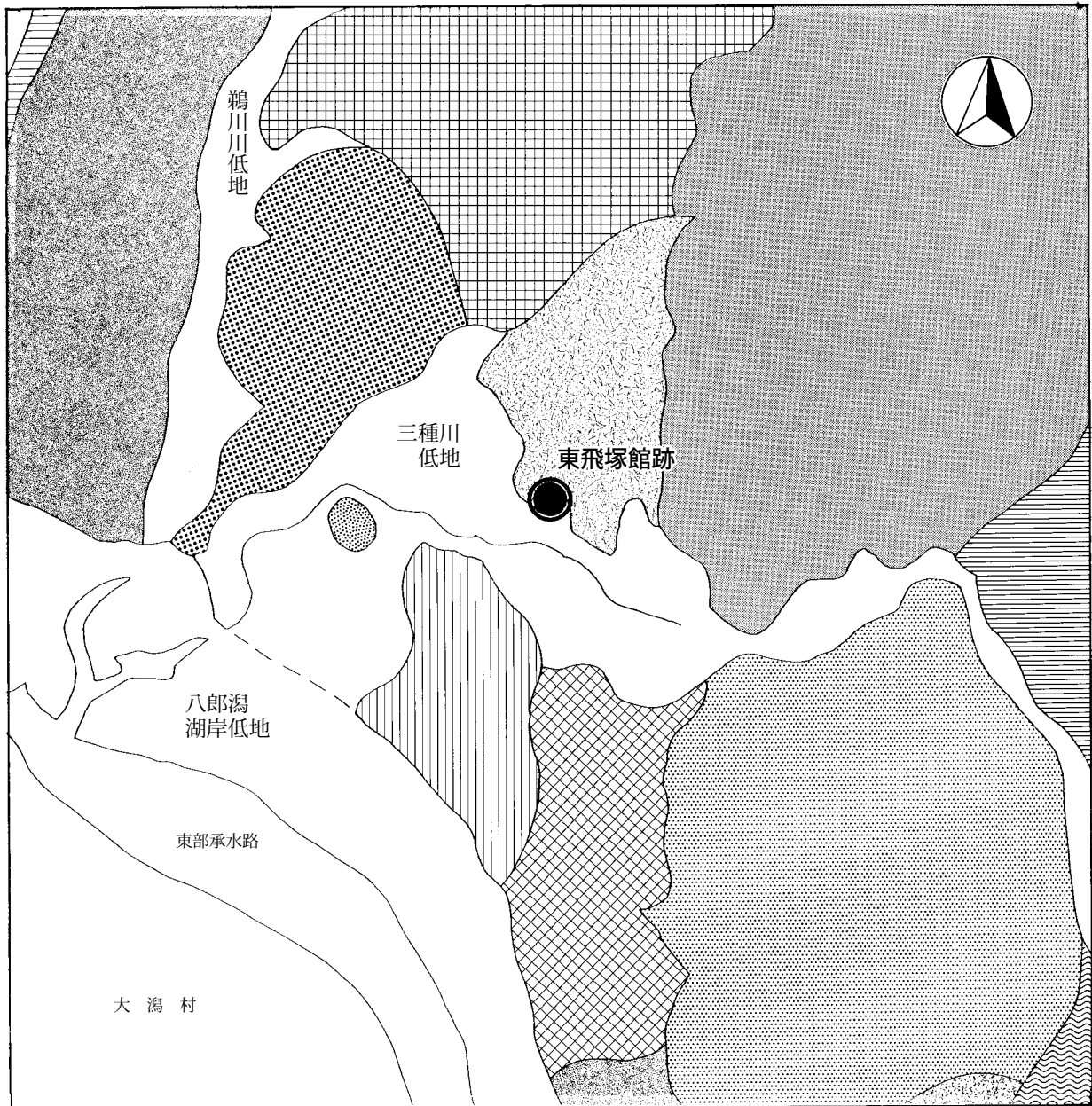
第2節 歴史的環境

能代山本地区の発掘調査は、主に琴丘町・能代市を中心に行われており、山本町では秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（山本地区）』2002（平成14）年に、およそ70遺跡が登録されているものの、本格的な発掘調査が行われた遺跡は少なく、特に中世以前の歴史については今後の調査に期待するところが大きい。ここでは東飛塚館跡周辺の遺跡について、発掘調査が行われた遺跡を中心に述べることにする。

旧石器時代の遺跡には、東飛塚館跡から南へ約3 kmの家の下遺跡がある。A T降灰以前とされるナイフ形石器・米ヶ森型台形石器・搔器・削器・彫器・石刃・石核など18,305点の石器が出土している。

縄文時代の遺跡では、東飛塚館跡から南へ約3 kmの中の沢遺跡で土坑10基、フラスコ状土坑1基、焼土遺構4基、土器埋設炉などが検出されている。遺物では、縄文時代前期から晩期にかけての土器・石器が出土しており、断続的に営まれた遺跡であることが報告されている。北西約3 kmの和田Ⅲ遺跡では、縄文時代中期前葉円筒上層 a 式期を中心とする集落跡が確認され、竪穴住居跡10軒、フラスコ状土坑5基が検出されている。その他に縄文時代晩期頃に属する竪穴住居跡2軒と土坑などが検出された。古館堤頭遺跡は、当遺跡から南西約3 kmの縄文時代中期を主体とする遺跡であり、1976（昭和51）年に山本町教育委員会によって発掘調査が行われている。竪穴状遺構1基、フラスコ状土坑が2基検出され、その他に縄文時代前期末葉から後期初頭にかけての土器・石器が出土している。古館堤頭遺跡から北へ約0.5 kmの古館堤頭Ⅱ遺跡では、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡が34軒検出されている。これら複式炉を持つ竪穴住居跡は標高の高い地点に集中し、調査区南西部の大型住居跡からは多量の土器が出土している。2002（平成13）年に発掘調査がおこなわれた長峰台遺跡は、東飛塚館跡から北西約3.3 kmに位置し、縄文時代後期を中心とする土器・石器のほか弥生土器も出土している。また家の下遺跡でも、縄文後期初頭から前葉を中心とする遺構が251基が見つかっており、とりわけフラスコ状土坑が多く検出され、その数は120基にのぼる。

弥生時代の遺跡では、山本町南西に隣接する八竜町に館の上遺跡がある。台地上に土器埋設遺構24



第2図 東飛塚館跡周辺の地形区分図

基、土坑56基が混在して見つかり、弥生時代の墓域と考えられている。

古代の遺跡では、当遺跡より南へ約3.7kmに位置する泉沢中台遺跡があり、平安時代（9世紀後半から10世紀）の製鉄を行った集落遺跡であることが報告されている。掘立柱建物跡・板堀跡・製鉄関連遺構が検出されており、製鉄関連遺物には約3トンの鉄滓や、椀形滓、フイゴの羽口などがある。また和田Ⅲ遺跡では1辺4mの竪穴住居跡1軒が検出されている。

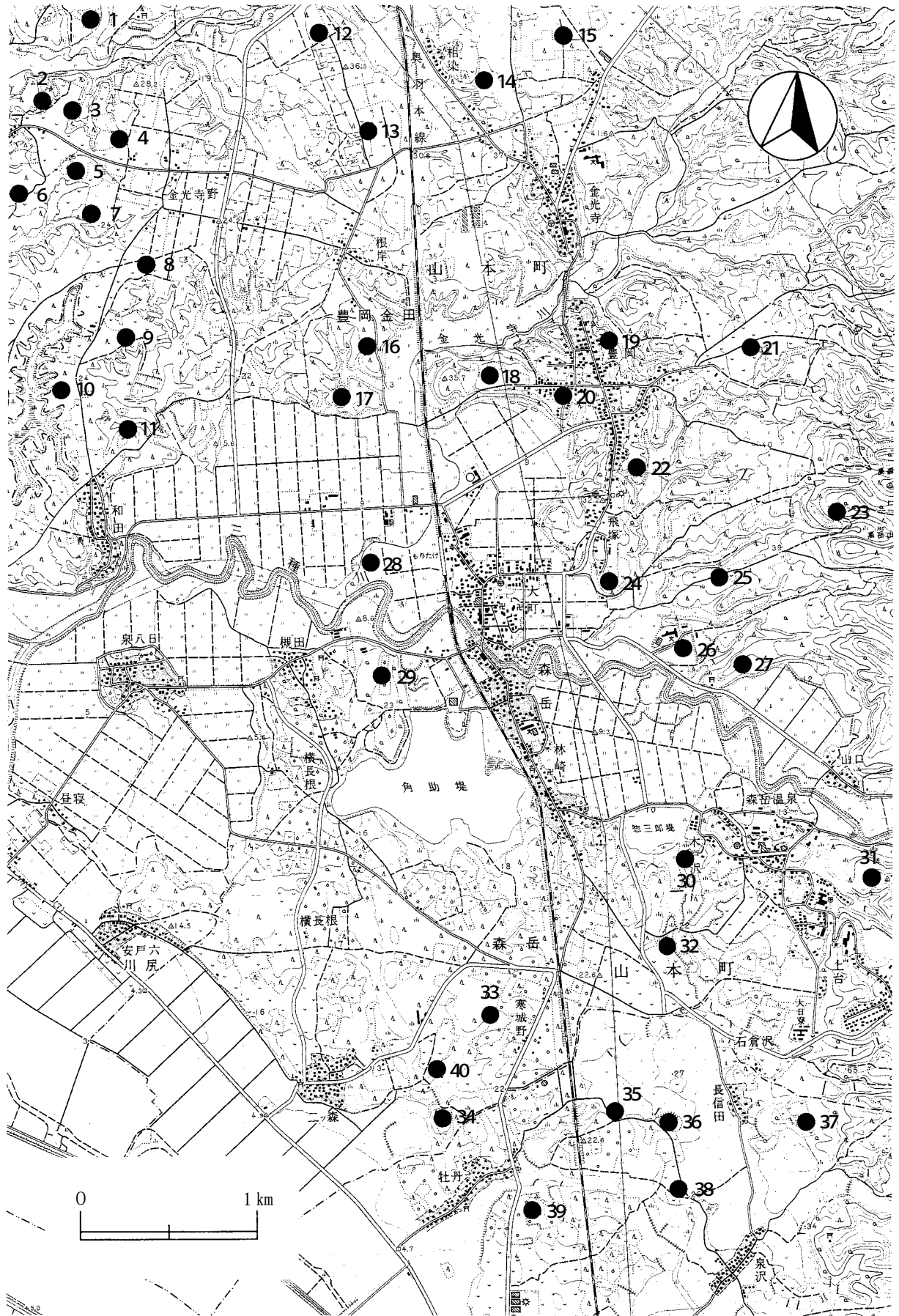
《参考文献》

- 山本町教育委員会『古館堤頭遺跡発掘調査報告書』1977（昭和52）年
 秋田県「土地分類基本調査」『森岳・羽後浜田』1984（昭和59）年
 秋田県教育委員会『県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—中の沢遺跡—』秋田県文化財調査報告書第255集 1995（平成7）年
 秋田県教育委員会『県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—一家の下遺跡（1）—』秋田県文化財調査報告書第256集 1995（平成7）年
 秋田県教育委員会『県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—一家の下遺跡（2）—』秋田県文化財調査報告書第275集 1998（平成10）年
 秋田県教育委員会『泉沢中台遺跡発掘調査報告書—県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ—』秋田県文化財調査報告書第276集 1998（平成10）年
 秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報19』（平成12年度）
 秋田県教育委員会『館の上遺跡—一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ—』秋田県文化財調査報告書第298集 2000（平成12）年
 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（山本地区）』2002（平成14）年
 秋田県教育委員会『古館堤頭Ⅱ遺跡—一般県道森岳鹿渡線地方道路切除工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書第338集 2002（平成14）年

	遺跡名	所在地	時代		遺跡名	所在地	時代
1	窪ノ沢	山本郡山本町外岡字窪ノ沢	古	21	白間台	山本郡山本町豊岡金田字白間台	縄・古
2	館城	山本郡山本町豊岡金田字保竜	縄	22	東飛塚	山本郡山本町森岳字東飛塚	不明
3	保留館	山本郡山本町豊岡金田字保竜	縄・古	23	ケゴ館	山本郡山本町森岳字上中沢	中
4	保竜Ⅳ	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古	24	東飛塚館	山本郡山本町森岳字東飛塚	縄・弥
5	保竜Ⅰ	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古	25	中台	山本郡山本町森岳字中台	縄・古
6	保竜Ⅱ	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古	26	関の台	山本郡山本町森岳字関の台	縄
7	保竜Ⅲ	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古	27	藤巻館	山本郡山本町森岳字館の沢	中
8	保竜Ⅴ	山本郡山本町豊岡金田字保竜	古	28	小挾間館	山本郡山本町森岳字小挾間	中
9	和田Ⅱ	山本郡山本町豊岡金田字駒ヶ崎	縄	29	鳥矢場	山本郡山本町森岳字鳥矢場	縄
10	和田Ⅰ	山本郡山本町豊岡金田字駒ヶ崎	縄	30	木戸沢	山本郡山本町森岳字木戸沢	縄
11	和田Ⅲ	山本郡山本町豊岡金田字駒ヶ崎	縄・古	31	木戸沢館	山本郡山本町森岳字木戸沢	古・中
12	長峰台	山本郡山本町外岡字長峰台	縄・弥	32	東堤沢	山本郡山本町森岳字東堤沢	縄
13	乗越	山本郡山本町外岡字乗越	縄・古	33	古館堤頭Ⅱ	山本郡山本町森岳字古館堤頭	縄
14	相染	山本郡山本町豊岡金田字石持	縄	34	古館堤頭Ⅰ	山本郡山本町森岳字古館堤頭	縄
15	石持	山本郡山本町豊岡金田字石持	縄	35	中の沢	山本郡琴丘町鹿渡字中の沢	縄
16	根岸Ⅰ	山本郡山本町豊岡金田字根岸	縄・古	36	家の下	山本郡琴丘町長信田字家の下	旧・縄
17	根岸Ⅱ	山本郡山本町豊岡金田字根岸	縄・古	37	長信田	山本郡琴丘町長信田字家後	縄
18	田倉館	山本郡山本町豊岡金田字田倉館	縄・中	38	泉沢中台	山本郡琴丘町鹿渡字泉沢中台	縄・古
19	田の沢	山本郡山本町豊岡金田字田の沢	縄	39	地蔵長根	山本郡琴丘町鹿渡字地蔵長根	縄
20	豊岡	山本郡山本町豊岡金田字田倉館	縄・古	40	古館堤	山本郡山本町森岳字古館堤頭	縄

※旧は旧石器時代、縄は縄文時代、弥は弥生時代、古は古代、中は中世を示す。

第1表 東飛塚館跡と周辺の遺跡一覧



第3図 周辺の遺跡

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

山本町は、八郎瀉残存湖の東部承水路に流れる鵜川川と三種川が形成する低地に位置しており、東飛塚館跡は、三種川低地に隣接し舌状に張り出す豊岡台地の南端部に立地している。豊岡台地の西側から南側にかけて広がる三種川低地の南西約800mには、山本町の中心部である森岳地区がある。

東飛塚館跡は、『秋田県の中世城館』によると、空堀・段築が確認された館跡として遺跡登録されていたが、昭和25年ごろ、耕作のため空堀は埋め立てられ、西側の一部を残すのみとなり、段築は南側に100mほど認められる程度である。遺跡の現況は、西から南側にかけての台地縁辺傾斜地を除く平坦地が、宅地と畑地に利用されている。

第2節 調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。計画路線内の基準杭L97.01（ $X=11451.770$ $Y=-63803.173$ ）を原点（MA50）とし、国家座標第X系座標北を求め、このラインを南北基線として、これに直交するラインを東西基線と定めた。この東西南北に沿って4m×4mメッシュを組み、その交点にグリッド杭を打設した。グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す・・・LS・LT・MA・MB・・・のアルファベット2文字と、南から北へ向かって昇順する・・・48・49・50・51・・・の2桁の数字を組み合わせた記号を記入した。なお、各グリッドの呼称は南東隅の杭の記号を用いている。

遺構の確認は掘り込み面の検出に努めたが、黒色土中での検出は困難で最終的には地山面での確認となった。検出当初、遺構は種別を問わず確認した順に、平成12年度は1から、平成13年度は101からの通し番号を付して精査を行った。また番号を登録した後に、遺構と判断されなかったものについては欠番とした。

遺物は遺構内出土のものは、遺跡名・遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは遺跡名・出土グリッド・出土層位・出土年月日を記入した袋に入れて取り上げた。

調査の記録は主に図面と写真によった。図面はグリッド杭を基準とした簡易遣り方測量を採用し、平面図・断面図とも、基本的には1/20の縮尺で作成した。遺物出土状況や土器埋設遺構など微細なものについては1/10で図化した。写真撮影は、35mmのモノクロ及びリバーサルフィルムを中心にネガカラーフィルムを交えて行った。遺物は洗浄、注記の後、同一個体と思われる遺物については極力接合・復元を行って実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。遺構については現場で図化した平面・断面図より第2原図を作成し、これをトレースした。

第3節 調査の経過

平成12年度

- 9月12日：調査開始。遺跡の環境整備を行う。発掘機材を搬入。
- 9月13日：遺構検出作業を開始。
- 9月14日：水没区域の排水作業。
- 9月18日：S K P 19～21より石器及び土器が出土。
- 9月19日：調査区東側南端の粗掘作業を行う。基本層序の調査を行う。
- 9月20日：S K 24～26の半截を行う。S I 27を検出。
- 9月21日：S D 50を検出。縄文土器が出土。
- 9月22日：S D 50断面写真及び土層断面図を作成。
- 9月25日：S I 27をS R 27・S N 49に名称変更。S I 48を検出。
- 9月26日：S N 49平面図作成。S I 48完掘写真撮影。
- 9月27日：S R 27半截作業。
- 9月28日：S R 27土層断面図作成。
- 9月29日：S I 48・S K 51・S R 27の調査を最後に調査終了。

平成13年度

- 9月13日～14日：表土除去終了。
- 9月19日：グリッド打設終了。
- 9月20日：調査開始。発掘機材の搬入、環境整備を行う。山本町教育委員会生涯学習課文化係田村征孝氏来跡。
- 9月21日：ベルトコンベアの搬入を行う。
- 9月25日：ベルトコンベアの配置と配線を行う。S K 101・102検出。
- 9月26日：三相発電機の防音壁を作成。
- 9月27日：S K 101・102調査終了。
- 9月28日：S R 110検出。
- 10月4日：S R 124及びS K 126検出。
- 10月5日：S N 132検出。
- 10月9日：S K 141検出。
- 10月10日：調査区北東側の柱穴様ピット群を検出。
- 10月15日：S R 124調査終了。調査区北東側の柱穴様ピット群調査終了。
- 10月18日：秋田県山本建設事務所の職員研修の一環で遺跡見学会を行う。
- 10月19日：S R 108断面写真を撮影。
- 10月22日：S R 110調査終了。
- 10月23日：S K F 163及びS K F 164を検出。
- 10月24日：S R 108調査終了。

- 10月25日：S K 166検出。山本町教育委員会田村征孝氏、山本町農林課嶋田仁氏来跡。
- 10月26日：S K F 164断面図終了。
- 10月29日：S I 48検出。山本町公民館職員遺跡見学。
- 10月30日：S I 48調査終了。S K 173検出。
- 10月31日：S K 178検出。
- 11月1日：S K 173及びS K 178調査終了。森岳小学校3階より遺跡遠景を撮影。森岳小学校6年生を対象とした遺跡見学会を11月6日に行うことを話し合う。
- 11月5日：調査区内の地形測量を行う。
- 11月6日：森岳小学校6年生を対象の遺跡見学会は雨のため中止。山本町教育委員会田村征孝氏来跡。
- 11月7日：S K F 164調査終了。調査区全景写真撮影。
- 11月8日：S K F 212調査終了し全調査終了。

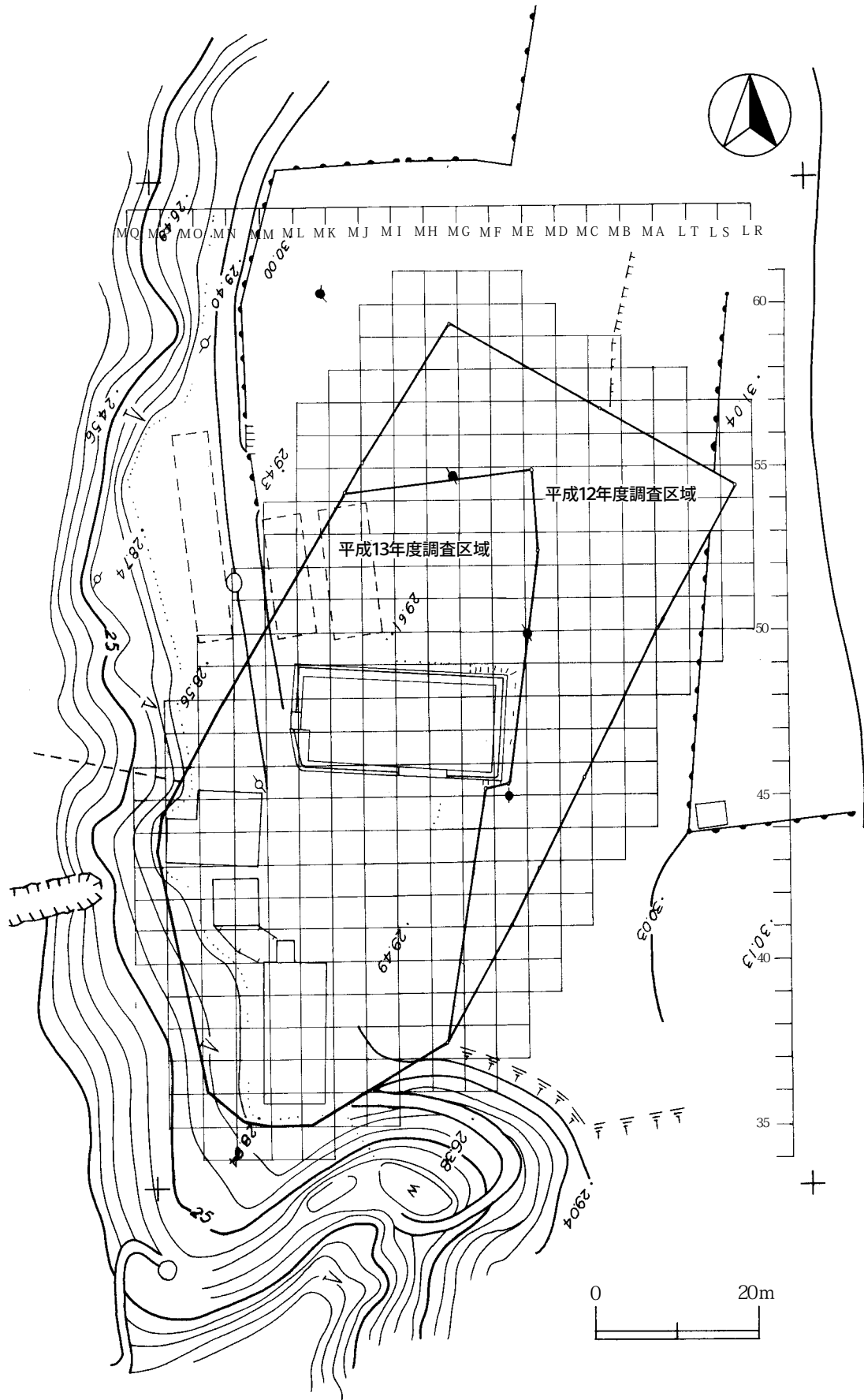
第4節 整理作業の方法と経過

平成12年度調査分は秋田県埋蔵文化財センター南調査課で、平成13年度調査分は秋田県埋蔵文化財センター中央調査課で行った。整理出土遺物の洗浄・注記・分類・接合を行い、これらの工程が終了した遺物から実測・採拓・トレース等の作業を行った。

遺構図面は現場で計測した図から、土器埋設遺構については縮尺10分の1とした第2原図を、それ以外は縮尺20分の1の第2原図を作成し、トレースを行った。遺物写真は35mmモノクロフィルムで撮影した。

《参考文献》

秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 1981（昭和56）年



第4図 グリッド配置図

第4章 調査の記録

第1節 調査区の地形と層位

本遺跡の調査区は西側と南側に急な傾斜地、北側と東側に平坦地が広がっている。発掘調査前の調査区内は北から東は畑地に、調査区中央から南西は宅地に利用されていた。調査区のほとんどは平坦な地形であると思われたが、調査区中央部には西側から沢が入っており、最近の造成によって埋め立てられていることがわかった。それ以外の平坦地は堆積土が薄く、宅地の造成や畑地の耕作によって削平されており、特に宅地範囲内は地山層まで造成工事が及んでいる。

このようなことから基本層序は、堆積土が厚く堆積している中央部西側沢部を中心に、下記のような結果を得た。なお、畑地（主としてMD51グリッド付近）では基本層序の第Ⅱ層・第Ⅳ層は認められなかった。

基本層序（第5図）

第Ⅰ層 黒褐色土（10Y R 3／2）しまり強。粘性強。耕作土および表土である。

第Ⅱ層 黒褐色土（10Y R 2／2）しまり強。粘性中。中央部西側沢部にみられる層位である。

第Ⅲ層 暗褐色土（10Y R 3／3）しまり中。粘性中。縄文中期から弥生時代の遺物包含層である。

第Ⅳ層 褐色土（10Y R 4／6）暗褐色土（10Y R 3／3）が20%混入している漸移層である。

第Ⅴ層 褐色土（10Y R 4／6）しまり強。粘性強。地山である。

第2節 検出遺構と出土遺物

1 竪穴住居跡

S I 48（第7・16図12、第4表、図版2-1・10-3-12）

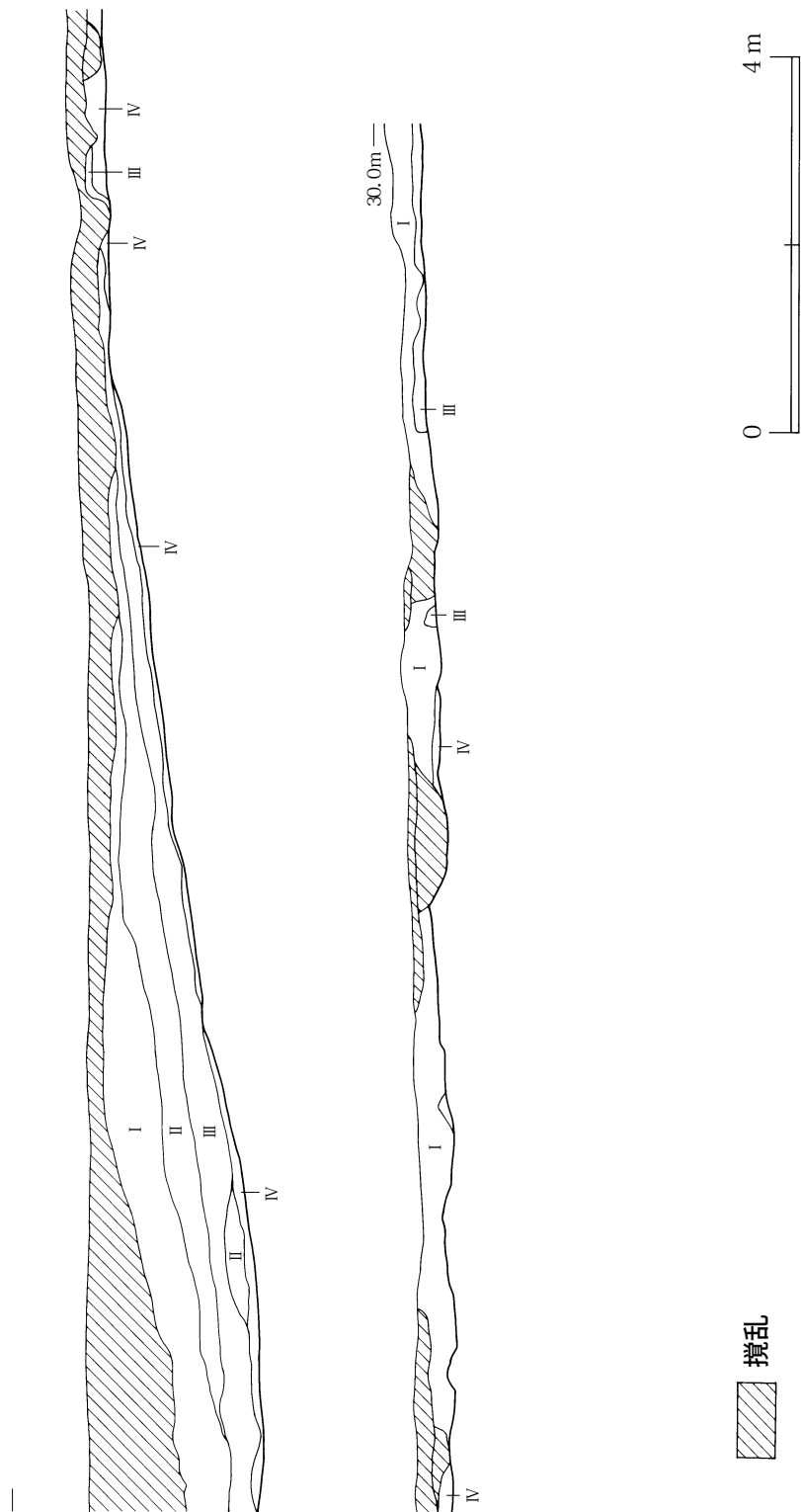
MF 40～42、MH 41、MH・MG 42グリッドのⅢ層で確認した。幅20～30cm、深さ20cmの壁溝が径9.86mのほぼ円形を描いて巡っているが、西側から南側にかけては攪乱を受けて失われている。柱穴・炉は確認されなかった。床面は平坦で東壁は緩やかに立ち上がる。覆土は耕作土であるⅠ層の下に、1層の黒色土、2層の黒褐色土が堆積しており、周溝には3層の暗褐色土を確認した。遺物は周溝内から石鏃1点（12）、剥片3点、土器1点が出土している。

石鏃12は凹基無茎鏃で基部の両端は鋭く突出している。両面とも細かな押圧剥離が行われ、先行剥離面は残っていない。

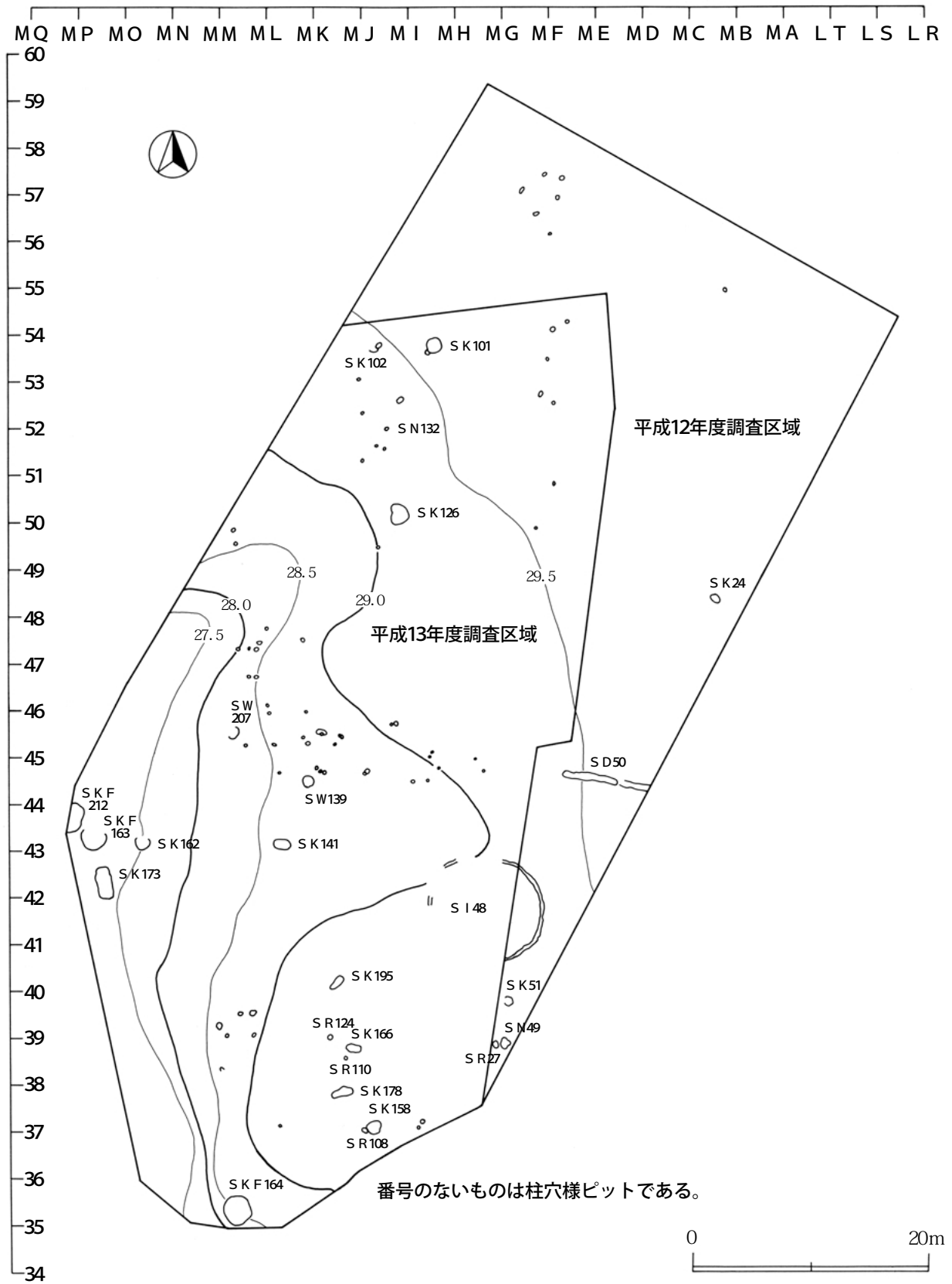
本住居跡の時期は、床面や壁溝内からの出土遺物が無く明確な時期は不明だが、周辺から弥生時代の土器が出土していることと、円形の壁溝が巡ることから弥生時代と考えられる。

2 土器埋設遺構

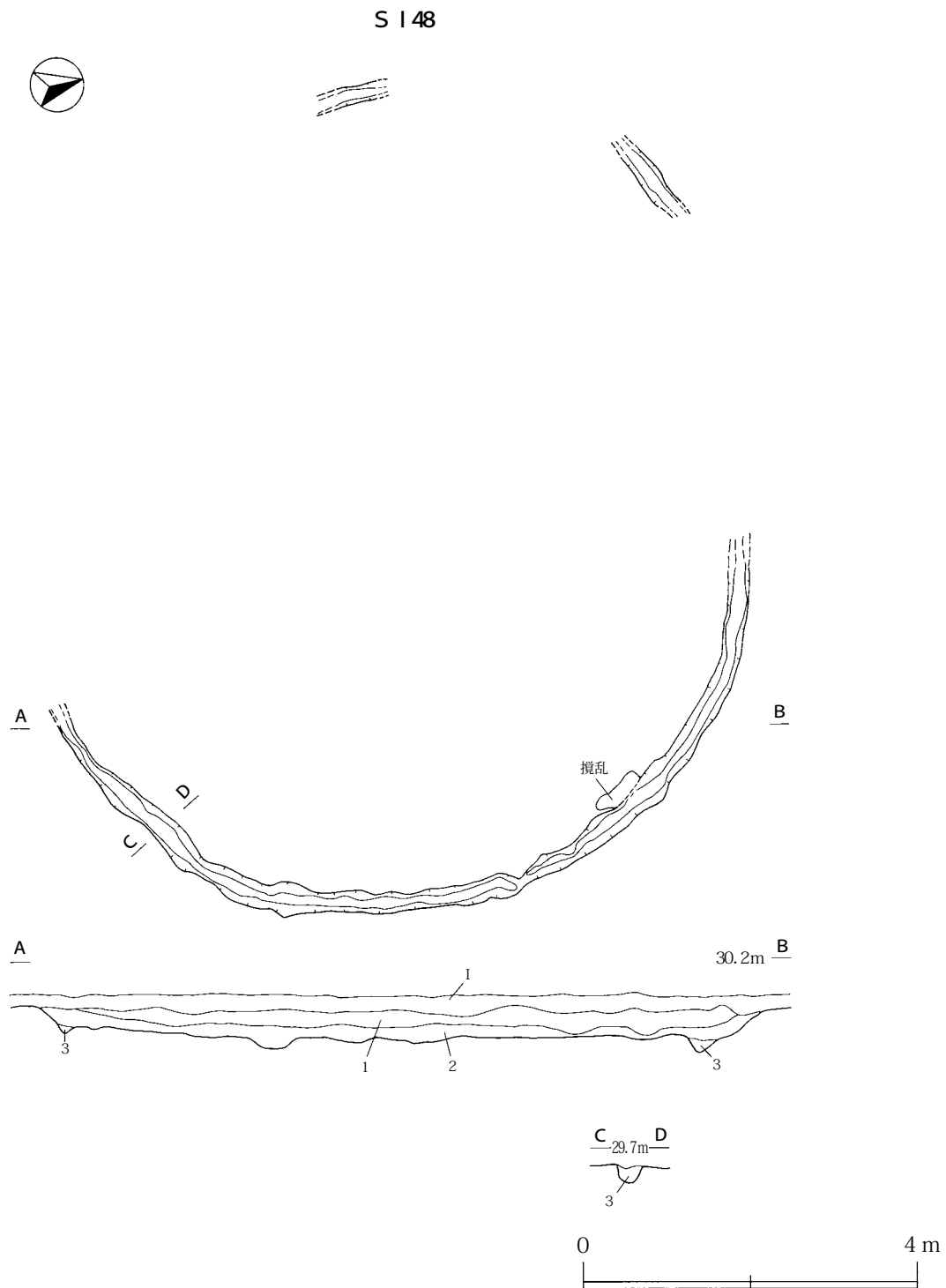
SR 27（第8・13図1・14図2、第3表、図版2-2・8・9-1）



第5図 基本層序



第6図 遺構配置図



S I 48

- 1 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり中。粘性中
- 1 黒色 (10Y R 2/1) しまり弱。粘性強。炭化物少量混入。
- 2 黒褐色 (10Y R 2/2) しまり弱。粘性強。炭化物少量混入。
- 3 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり中。粘性強。炭化物少量混入。地山ブロック少量混入。

第7図 S I 48 竪穴住居跡

MG38グリッドのⅢ層で確認した。正立した壺に鉢形土器を倒立させて蓋としている。土器埋設のための掘り込みは、円形を呈し、直径約60cm、確認面からの深さは28cmである。

覆土は8層に分けられた。そのうち土器内の覆土は7層に分けられ、主として、にぶい黄褐色土と暗褐色土からなる。全体にかたくしまり、炭化物の混入が見られる。7層は基本層序の第Ⅲ層で土器を埋設した後に流入したものと考えられる。土器と掘り込みの隙間には地山ブロックが混入する褐色土が充填していた。

1は本体として使用された壺形土器である。体部上半に最大径をもち、頸部から口縁部は外反している。頸部はくびれ、丸みのある肩部から体部に至る。全面に丁寧なミガキが認められる。口唇部に2～3個一組の刻みが等間隔に付され、頸部の境には3本の平行沈線が巡る。平行沈線の下には列点文が施される。肩部にも同様に平行沈線と列点文が巡っている。底部は穿孔されている。体部の欠損部にはアスファルトによる補修痕が認められる。土器内覆土から、外径8mm、内径4mm、高さ4mm程の石製の玉が出土している。

2は蓋として使用された鉢形土器で、内湾した口縁部直下に最大径を持ち、そこから直線的に底部に至る器形である。底部は欠損している。口縁部には2本の平行沈線の間、短い沈線が施され、工字文風の文様が表出される。体部にはLR縄文原体の縦位回転による斜縄文が施される。内面の口唇直下には1本の沈線が巡る。

S R108 (第8・14図3、第3表、図版3-1～3・9-2)

MI・MJ36・37グリッドのV層で確認した。土器埋設のための掘り込みは、円形を呈し、直径55cmで、確認面からの深さは11cmである。土器は正立状態で埋設され、体部上半は欠損していた。土器内の覆土は4層に分けられ、土器と掘り込みの隙間には地山ブロックが混入する黒褐色土が充填していた。土器内の覆土である2・4層は、基本層序のⅢ層が土器埋設後に流入したものと考えられる。

3は体部上半に最大径を持つ壺形土器である。全面に丁寧なミガキが認められる。体部上半と頸部には2本の平行沈線が巡る。内面も外面同様に丁寧なミガキが施される。底部は穿孔されている。

S R110 (第8・15図5、第3表、図版4-1～3・9-3)

MK38グリッドのV層面で確認した。土器埋設のための掘り込みは直径30cmで、確認面からの深さは15cmである。

土器は正立状態で埋設され、体部上半は欠損していた。土器内の覆土は3層に分けられ、土器と掘り込みの隙間には褐色土が充填されていた。土器内の覆土である1・2層は、基本層序のⅢ層が土器埋設後に流入したものと考えられる。底部穿孔はされていない。

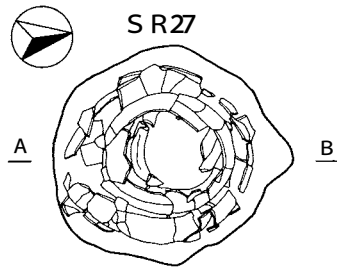
5はわずかに上げ底気味の底部から直線的に立ち上がる深鉢形土器と考えられる。

S R124 (第8・15図4、第3表、図版5-1～3・10-1)

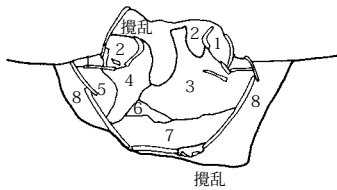
MJ38・MJ39グリッドのV層で確認した。土器埋設のための掘り込みは直径45cmで、確認面からの深さは最大18cmである。

土器は正立状態で埋設され、体部上半は欠損していた。土器内の覆土は4つに分けられ、土器と掘り込みの隙間は、地山ブロックの混入する暗褐色土が充填されていた。土器内の覆土である2・3層は、基本層序のⅢ層が土器埋設後に流入したものと考えられる。底部は穿孔されている。

4は壺形土器の下半部で内外面にミガキが認められる。体部の欠損部にはアスファルトによる補修

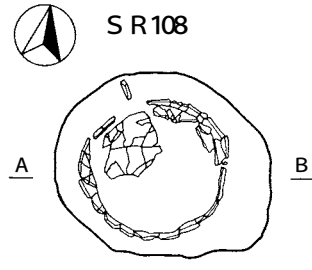


A 29.8m B

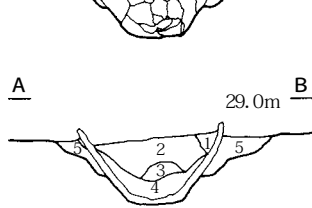


SR27

- 1 にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) しまり強。粘性中。炭化物1%混入。
- 2 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり強。粘性弱。地山ブロック少量混入。
- 3 にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) しまり強。粘性弱。炭化物3%混入。地山ブロック20%混入。
- 4 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり強。粘性弱。炭化物少量1%混入。地山ブロック少量混入。
- 5 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性中。炭化物1%混入。地山ブロック10%混入。
- 6 にぶい黄褐色 (10Y R 5/3) しまり強。粘性弱。炭化物1%混入。地山ブロック25%混入。
- 7 暗褐色 (7.5Y R 3/4) しまり強。粘性強。炭化物1%混入。
- 8 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性中。炭化物1%混入。地山ブロック20%混入。

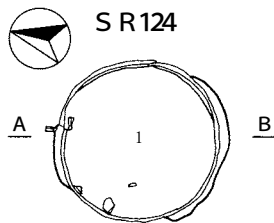


A 29.0m B

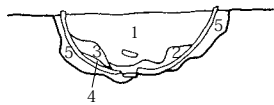


SR108

- 1 褐色 (10Y R 4/6) しまり強。粘性中。
- 2 暗褐色 (7.5Y R 3/3) しまり強。粘性強。炭化物10%混入。地山ブロック15%混入。
- 3 褐色 (10Y R 4/6) しまり強。粘性強。
- 4 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり強。粘性強。炭化物少量混入。
- 5 黒褐色 (10Y R 3/2) しまり強。粘性強。炭化物 (径1~5mm) 2%。地山ブロック (径2~5mm) 10%。

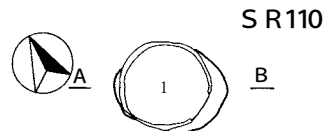


A 29.2m B

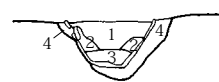


SR124

- 1 暗褐色土 (10Y R 3/4) しまり強。粘性強。炭化物 (径約1~10mm) 20%混入。焼土ブロック (径1~5mm) 1%混入。地山ブロック (径3~4mm) 10%混入。
- 2 暗褐色土 (10Y R 3/4) しまり中。粘性弱。
- 3 暗褐色土 (7.5Y R 3/4) しまり中。粘性強。炭化物 (径3mm) 1%混入。
- 4 極暗赤褐色土 (5Y R 3/4) しまり強。粘性弱。
- 5 暗褐色土 (10Y R 3/3) しまり強。粘性強。炭化物 (径1~3mm) 1%。地山ブロック少量混入。



A 29.3m B



SR110

- 1 暗褐色土 (10Y R 3/4) しまり強。粘性強。炭化物 (径1~3mm) 少量混入。焼土ブロック (径1mm) 少量混入。
- 2 暗褐色土 (10Y R 3/4) しまり強。粘性強。炭化物 (径3~5mm) 15%混入。
- 3 極赤褐色 (10R 3/3) しまり中。粘性弱。炭化物 (径1~3mm) 15%混入。
- 4 褐色土 (10Y R 4/6) しまり強。粘性強。炭化物 (径1mm) 3%混入。



第8図 SR27・108・110・124土器埋設遺構

痕が認められる。

3 土坑

S K 24 (第9図)

MB 48グリッドのⅢ層で確認した。平面形は楕円形を呈し、長軸（北西—南東）82cm、短軸（北東—南西）66cm、確認面からの深さは14cmである。床面は中央に向かって緩く傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土の1層は基本層序の第Ⅲ層に、2層は第Ⅳ層に由来し、このことから本土坑は第Ⅲ層形成期かそれ以前に掘り込まれたものと考えられる。

S K 51 (第9図)

MG 39グリッドのⅢ層で確認した。平面形は楕円形を呈し、長軸（東—西）82cm、短軸（北—南）70cm、確認面からの深さ20cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は単一層で炭化物ブロックと地山ブロックが、まばらに混入している暗褐色土である。土器2点が出土している。

S K 101 (第9図)

MH 53グリッドのⅤ層で確認し、土層観察によりS K P 103よりも新しいことが分かった。平面形は楕円形を呈し、長軸（北—南）1.34m、短軸（東—西）1.16m、確認面からの深さは27cmである。底面は平坦で、中央には直径20cm、深さ16cmのピットがある。壁は外傾して立ち上がる。覆土の4層は壁の崩壊土で、他の暗褐色土は第Ⅲ層が自然流入したものである。本土坑の時期は、覆土の堆積状況から第Ⅲ層形成期かそれ以前と考えられる。弥生土器片14点、剥片が1点出土している。

S K 102 (第9図)

MI 53グリッドのⅤ層で確認した。北側と西側で攪乱を受けており、規模形状は不明である。確認面からの深さは8cmで東側でS K P 114を切っている。底面は平坦で緩やかに立ち上がる。覆土は単一層で炭化物が混入した暗褐色土である。

S K 126 (第9図)

MI 49・50グリッドのⅤ層で確認した。平面形は不整形を呈し、長軸（北西—南東）1.8m、短軸（北東—南西）1.72m、確認面からの深さは27cmである。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。覆土は基本層序第Ⅳ層が自然流入したものである。本土坑の時期は、覆土の堆積状況から第Ⅳ層形成期かそれ以前と考えられる。遺物は二次加工のある剥片1点、縄文土器2点が出土している。

S K 141 (第9・15図6～11・16図17～19、第3・4表、図版10—2・10—3—17・19)

MK 43グリッドのⅤ層で確認した。平面形は不整形を呈し、長軸（東—西）1.38m、短軸（北—南）82cm、確認面から深さは22cmである。底面は凹凸があつて壁はなだらかに立ち上がる。同一個体と思われる甕（6・8）、搔器3点（17・18・19）、二次加工のある剥片1点、剥片10点、黒曜石を素材とする剥片2点出土している。

土器6・8は同一個体の甕形土器で、ほぼ直立する口縁からわずかに膨らみのある体部に至る。口唇は平坦で、体部には全面にL R原体の斜位回転による縦位縄文が施される。7・10は鉢形土器で、7は体部上半の無文部に2条の平行沈線が巡り、体部上半にはL R原体の横位回転、体部中半には同一原体による斜位回転による縦位縄文が施される。10は口縁部に4条の幅広い沈線が巡り、体部にはR L原体の斜位回転による横位縄文が施される。9は壺形土器の肩部の破片と考えられる。

石器17・18・19は素材剥片の形状を変えず、側縁部に細かな二次調整を行って刃部を作出した搔器である。

S K 158 (第10図、図版6-1)

M I 36・37グリッドのV層で確認した。平面形は不整円形を呈し、長軸(北-南)1.18m、短軸(東-西)1.08m、確認面からの深さは26cmである。底面はわずかに起伏があり、壁は急角度で立ち上がる。覆土は単一層で、地山ブロックの混入した黒褐色土によって、人為的に埋められたものである。

S K 162 (第10図)

MN43グリッドのV層で確認した。平面形は円形を呈し、直径約1.1m、確認面からの深さは57cmである。底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。覆土の1~10・13~15層は地山土がブロック状になっており、人為によるものである。11・12層は基本層序第Ⅲ層が流入したものである。本土坑の時期は、覆土の堆積状況から第Ⅲ層形成期かそれ以前と考えられる。遺物は縄文土器が3点出土している。14層出土の炭化材の放射性炭素年代測定では縄文時代晩期(約2710年前)の年代が得られ、樹種同定結果では広葉樹という結果を得ている。

S K 166 (第10・16図15・16・20、第4表、図版10-5)

M J 38グリッドのV層で確認した。平面形は、長軸(東-西)1.12m、短軸(北-南)71cmの方形を呈し、確認面からの深さは9cmである。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。覆土は基本層序第Ⅲ層の単一層である。本土坑の時期は、覆土の堆積状況から第Ⅲ層形成期かそれ以前と考えられる。土器9点、石器は搔器3点(15・16・20)、剥片10点が出土している。

搔器15は、三角形の素材剥片の2側縁に刃部を設けている。16・20は打面を残した素材剥片で一側縁に粗い剥離による刃部がある。

S K 173 (第10・16図13・14、第4表、図版10-3-13・14)

M O 42グリッドのV層で確認した。平面形は、長軸(北-南)2.62m、短軸(東-西)1.4mの長方形を呈し、確認面からの深さは28cmである。底面は平坦で、壁は北側で急角度に、南側で緩やかに立ち上がる。覆土8層は基本層序第Ⅰ層が流入したものであり、本土坑の時期は覆土の堆積状況から第Ⅰ層かそれ以前と考えられる。石鏃2点(13・14)、搔器1点、剥片11点が出土している。

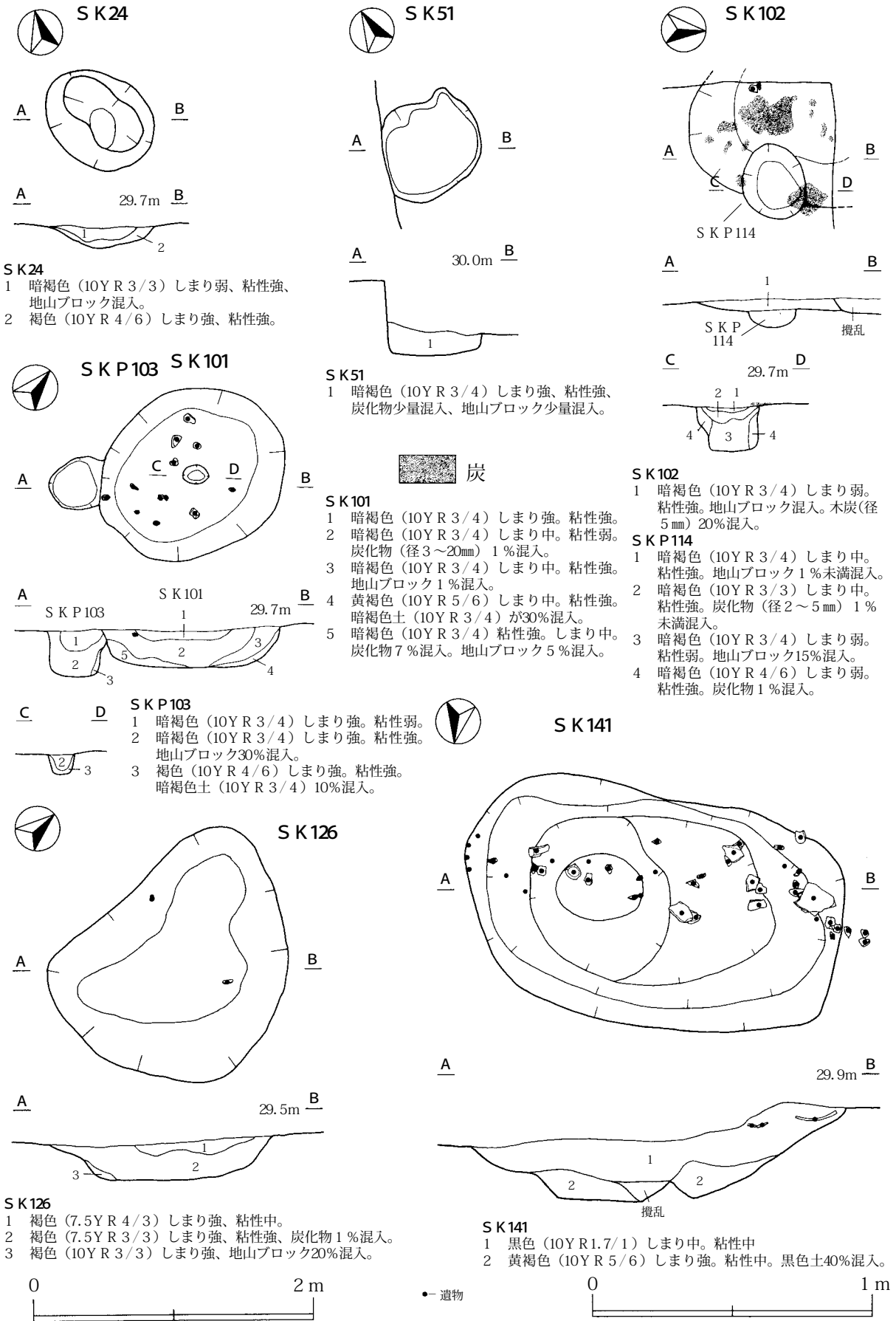
石鏃13・14はいずれも有茎鏃で両面に細かな押圧剥離を行っているが、13には両面に先行剥離面が残っている。14の石材は黒曜石である。

S K 178 (第10図、図版6-2)

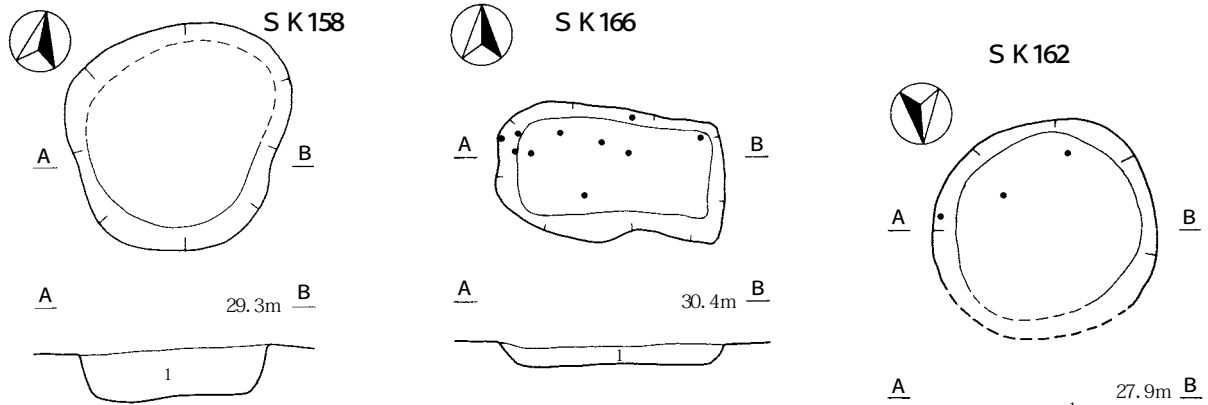
M J 37グリッドのV層で確認した。平面形は楕円形を呈し、長軸(東-西)1.93m、短軸(東-西)88cm、確認面からの深さは58cmである。底面には起伏があり、壁は西側で急角度に、東側は緩やかに立ち上がる。覆土は基本層序第Ⅲ層に由来し、人為的なものと考えられる。本土坑の時期は、覆土の堆積状況から第Ⅲ層形成期かそれ以前と判断される。剥片1点が出土している。

S K 195 (第10図)

M J グリッドのV層で確認した。平面形は楕円形を呈し、長軸(北東-南西)1.37m、短軸(北西-南東)70cm、確認面からの深さは25cmである。底面は中央に向かって緩く傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土5層は基本層序第Ⅲ層に由来することから、本土坑の時期は第Ⅲ層形成期かそれ以前と考えられる。

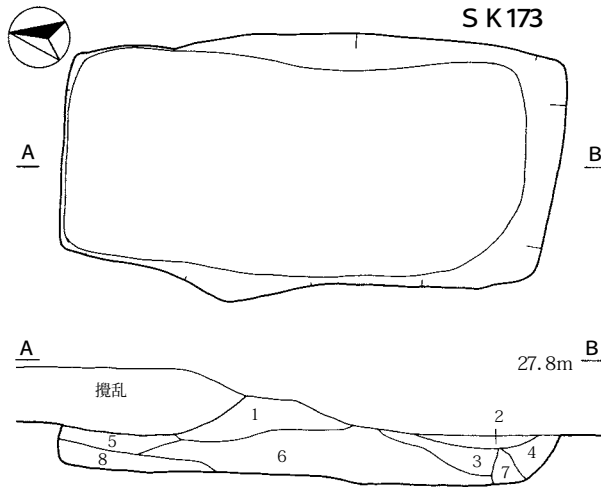
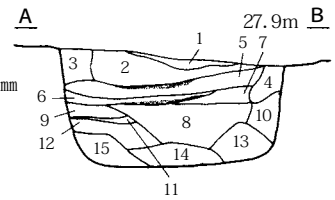


第9図 SK24・51・101・102・126・141土坑



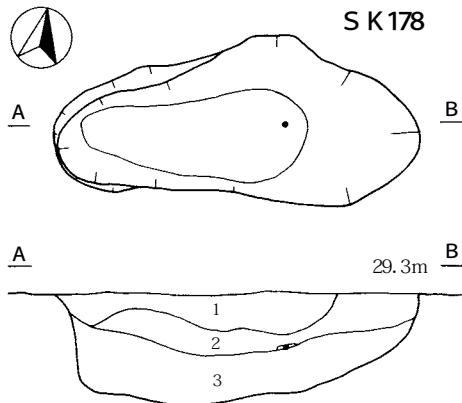
S K 158
 1 黒褐色 (10Y R 2/2) しまり中。粘性中。地山ブロック15%

S K 166
 1 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり強。粘性中。炭化物 (径1mm以下) 1%混入。地山ブロック (径1mm以下) 10%混入。

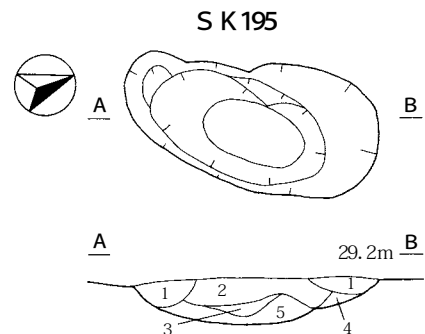


S K 173
 1 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり弱。粘性弱。炭化物 (径2mm以下) 2%混入。
 2 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり弱。粘性弱。地山混入。
 3 オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) しまり強。粘性弱。砂質。炭化物3%混入。地山ブロック5%混入。
 4 褐色 (10Y R 4/6) しまり弱。粘性強。暗褐色土少量混入。
 5 褐色 (10Y R 3/4) 地山ブロック40%以上。
 6 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり弱。粘性弱。黄褐色土ブロック20%混入。炭化物 (径2mm以下) 2%混入。
 7 暗褐色 (10Y R 3/4) 粘性弱。褐色土ブロック7%混入。
 8 黒褐色 (10Y R 3/2) しまり弱。粘性弱。炭化物1%未滿混入。

S K 162
 1 黄色 (5Y 7/6) しまり弱。粘性強。黄褐色 (2.5Y 5/6) 混入。
 2 オリーブ黄色 (2.5Y 4/3) しまり強。粘性強。炭化物7%混入。褐色土混入2%。
 3 にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) しまり中。粘性中。褐色土ブロック5%。黄褐色土ブロック7%。
 4 にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) しまり中。粘性強。褐色土ブロック混入10%。
 5 にぶい黄褐色 (2.5Y R 6/4) しまり中。粘性強。褐色土ブロック、黄褐色土ブロック、暗褐色土ブロック混入。
 6 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) しまり強。粘性強。褐色土ブロック3%混入。
 7 褐色 (10Y R 4/6) しまり強。粘性強。暗灰黄 (2.5Y 4/2) 50%混入。炭化物2%混入。
 8 にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) しまり強。粘性強。褐色土ブロック7%混入。炭化物 (径2mm以下) 3%混入。
 9 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性強。炭化物 (径2mm) 2%混入。
 10 にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) しまり強。粘性強。黄褐色土ブロック (径2~3cm) 2箇所混入。
 11 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり弱。粘性弱。黄褐色土ブロック20%混入。
 12 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり中。黄褐色土ブロック30%。
 13 褐色 (10Y R 4/4) しまり弱。粘性中。黄褐色土ブロック10%混入。
 14 にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) しまり中。粘性強。炭化物 (径2mm) 5%混入。
 15 黄褐色 (10Y R 5/8) 粘性中。

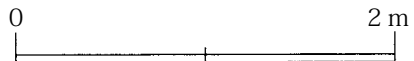


S K 178
 1 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり強、粘性中、地山ブロック少量混入。
 2 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり強、粘性中、炭化物1%混入。
 3 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり中、粘性強、地山ブロック7%混入。



S K 195
 1 にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) しまり中。粘性弱。炭化物2%混入。径15mmの褐色土15%混入。
 2 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり強。粘性弱。炭化物2%。
 3 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性弱。暗褐色土40%混入。
 4 褐色 (10Y R 4/4) しまり中。粘性強。暗褐色土10%混入。
 5 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり弱。粘性弱。褐色土20%混入。

●遺物



第10図 S K 158・162・166・173・178・195土坑

4 フラスコ状土坑

S K F 163 (第11図、図版7-1)

MO43グリッドのV層で確認した。開口部は直径2.15mであり、底面は長軸（北東-南西）2.1m、短軸（北西-南西）1.92mの不整な楕円形を呈している。確認面からの深さは1.8mである。覆土の7~16層は遺構の壁が徐々に崩落し堆積したもので、6層は基本層序第Ⅲ層に由来する。遺物は縄文土器が6点出土した。底面付近から出土した炭化材の放射性炭素年代測定では縄文時代晩期（約2,710年前）、炭化材樹種同定結果では広葉樹という結果を得ている。

S K F 164 (第11・16図21・17図23、第4表、図版10-3-23)

ML35グリッドのV層で確認した。平面形は円形を呈し、開口部は直径2.3m、底面は2.1m程の円形を呈している。確認面からの深さは2.08mである。覆土8~10層は壁の崩落土で、11層は基本層序第Ⅲ層に由来する。11層は本遺構の使用、または廃棄直前に堆積したものと考えられ、本土坑の時期は第Ⅲ層形成期と判断される。遺物は土器が14点、石器は剥片3点、石核1点(21)、台石1点(23)が出土した。底面付近から出土した炭化材の放射性炭素年代測定では縄文時代後期（約3,520年前）、炭化材樹種同定結果では広葉樹という結果を得ている。

S K F 212 (第11図、図版7-2)

MP・MO43・MP44グリッドのV層で確認したが、西側は調査区外に及んでいる。開口部は径2.5m、底面は直径1.5mの円形を呈するものと想定される。確認面からの深さは1.42mである。覆土の3層は基本層序の第Ⅲ層に由来し、5~13層は壁の崩落が繰り返されて形成されている。覆土の堆積状況から本土坑は、基本層序第Ⅲ層以前に掘り込まれたものと考えられる。遺物は土器1点、石器は二次加工のある剥片1点、剥片5点が出土している。

5 溝跡

S D 50 (第12図、図版7-3)

MC・MD・ME44グリッドのⅢ層で確認した。長さ7.5m、幅45~68cm、深さ16cmでの溝跡である。床面は中央に向かって緩く傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土の3層は、基本層序第Ⅳ層が自然流入したものである。本遺構の時期は、覆土の堆積状況から第Ⅳ層形成期かそれ以前と考えられる。遺物は縄文土器が20点出土した。

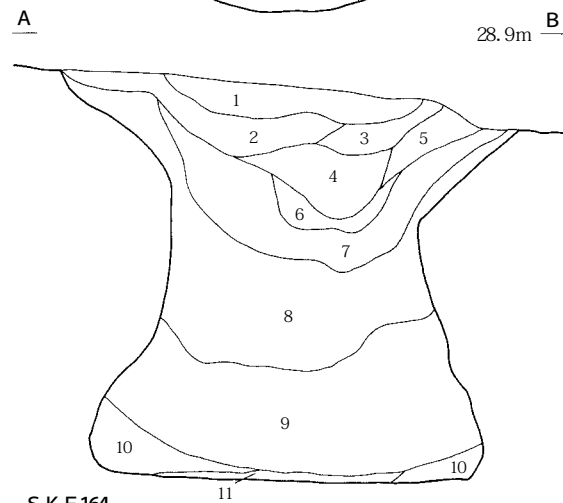
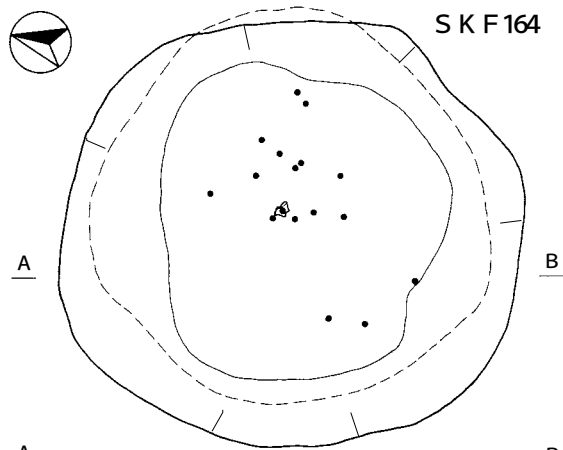
6 焼土遺構

S N 49 (第12図)

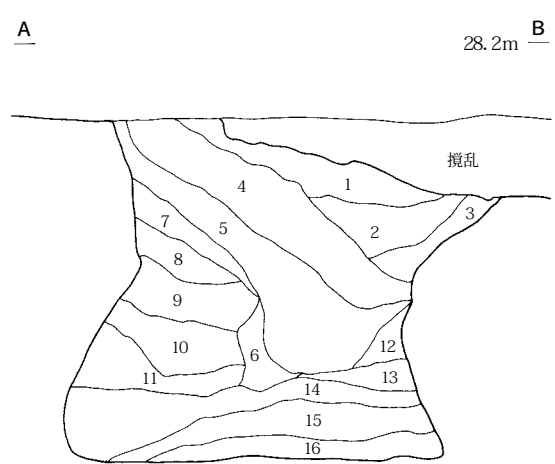
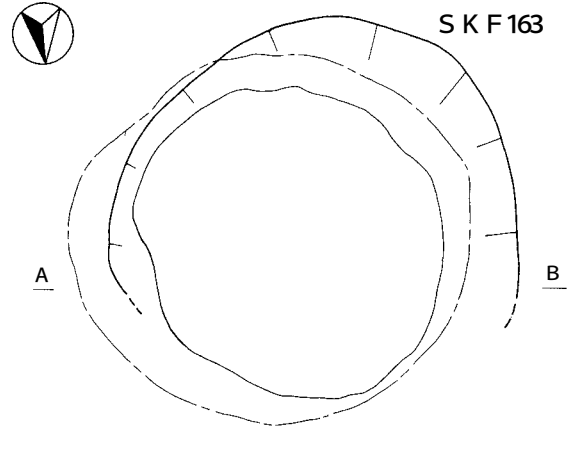
MG・MH38グリッドのⅢ層で、86cm（北西-南東）×82cm（北東-南西）の範囲に赤褐色の焼土の広がりを確認した。焼土の厚さは7cmで、硬くしまりがある。

S N 132 (第12図)

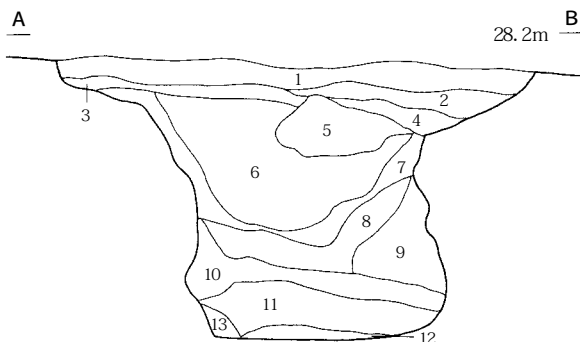
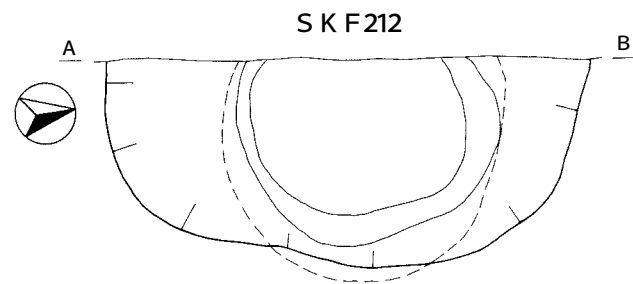
MI51・52グリッドのⅣ層面で確認した。直径37cmの円形の掘り込みの覆土中に、厚さ4cmの明褐色の焼土が認められた。掘り込みの深さは、確認面から6cmで、覆土2層は基本層序の第Ⅲ層に由来する。



- SK F 164**
- 1 黒褐色 (10Y R 2/2) しまり強。粘性中。炭化物 2% 混入。
 - 2 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり強。粘性中。炭化物 3% 混入。
 - 3 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり中。粘性中。炭化物 1% 混入。地山ブロック 50% 混入。
 - 4 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり弱。粘性中。炭化物 1% 混入。
 - 5 黒褐色 (10Y R 2/3) しまり中。粘性強。炭化物 15% 混入。地山ブロック 5% 混入。
 - 6 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり弱。粘性強。炭化物 2% 混入。
 - 7 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性強。炭化物 1% 混入。
 - 8 褐色 (10Y R 4/6) しまり強。粘性強。炭化物 1% 混入。
 - 9 褐色 (10Y R 4/6) しまり強。粘性強。炭化物 1% 混入。
 - 10 褐色 (10Y R 3/4)
 - 11 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり強。粘性強。炭化物 2% 混入。



- SK F 163**
- 1 黒褐色 (10Y R 2/3) 砂質。しまり弱。粘性なし。炭化物 2% 混入。
 - 2 暗褐色 (10Y R 3/3) 砂質。しまり弱。粘性なし。炭化物 5% 混入。褐色土ブロック 20% 混入。
 - 3 にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) 砂質。しまり弱。粘性なし。
 - 4 暗褐色 (10Y R 3/4) 砂質。しまり弱。粘性なし。炭化物 7% 混入。
 - 5 暗褐色 (10Y R 3/4) 砂質。しまり中。粘性なし。黄褐色土 40% 混入。炭化物 2% 混入。
 - 6 暗褐色 (10Y R 3/4) 砂質。しまり中。粘性なし。黄褐色土 30%、明褐色土 30% 混入。
 - 7 にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) 粘土と砂質。
 - 8 黄褐色 (10Y R 5/6) 粘土質。粘性強。炭化物 1% 混入。
 - 9 明褐色 (10Y R 6/6) 粘土質。粘性強。褐色土ブロック 10% 混入。
 - 10 黄褐色 (10Y R 7/8) 粘土質。しまり中。粘性強。
 - 11 明褐色 (2.5Y R 7/6) 粘土質。しまり中。粘性強。
 - 12 黄褐色 (10Y R 5/6) 粘土質。しまり中。粘性強。砂質褐色土 30% 混入。
 - 13 明褐色 (10Y R 6/8) 粘土質。しまり中。粘性強。
 - 14 黄褐色 (10Y R 7/8) 粘土質。しまり強。粘性強。砂質土塊 5% 混入。
 - 15 黄褐色 (10Y R 5/6) 粘土質。しまり強。粘性強。褐色粘土 15% 混入。
 - 16 黄褐色 (10Y R 5/8) 粘土質。しまり強。粘性強。炭化物 (径 1~2cm) 15% 混入。



- SK F 212**
- 1 暗褐色 (10Y R 3/3) しまり強。粘性弱。
 - 2 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性弱。
 - 3 暗褐色 (10Y R 3/4) しまり強。粘性弱。
 - 4 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性弱。
 - 5 砂塊
 - 6 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性弱。炭化物 (径 1~10mm) 1% 混入。
 - 7 にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) しまり強。粘性弱。炭化物 (径 3mm) 1% 混入。
 - 8 にぶい黄褐色 (10Y R 5/4) しまり強。粘性強。炭化物 (径 1mm) 1% 以下混入。
 - 9 黄褐色 (10Y R 5/6) しまり強。粘性弱。
 - 10 褐色 (10Y R 4/4) しまり弱。粘性弱。炭化物 (径 1~5mm) 1% 以下混入。
 - 11 黄褐色 (10Y R 5/6) しまり強。粘性強。炭化物 (径 3~10mm) 1% 以下混入。
 - 12 褐色 (10Y R 4/4) しまり強。粘性強。炭化物 (径 3mm) 1% 以下混入。
 - 13 黄褐色 (10Y R 5/6) しまり強。炭化物 (径 1~10mm) 1% 以下混入。

● 遺物



第11図 SK F 163・164・212 フラスコ状土坑

7 炭窯

S W139 (第12図)

MK44グリッドのV層面で確認した。平面形は直径1mの円形を呈し、確認面からの深さは23cmである。床面は中央に向かって緩く傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。底面には厚さ1cmの炭化物層が堆積していた。本遺構の時期は覆土の堆積状況から、第Ⅲ層形成期かそれ以前であると考えられる。

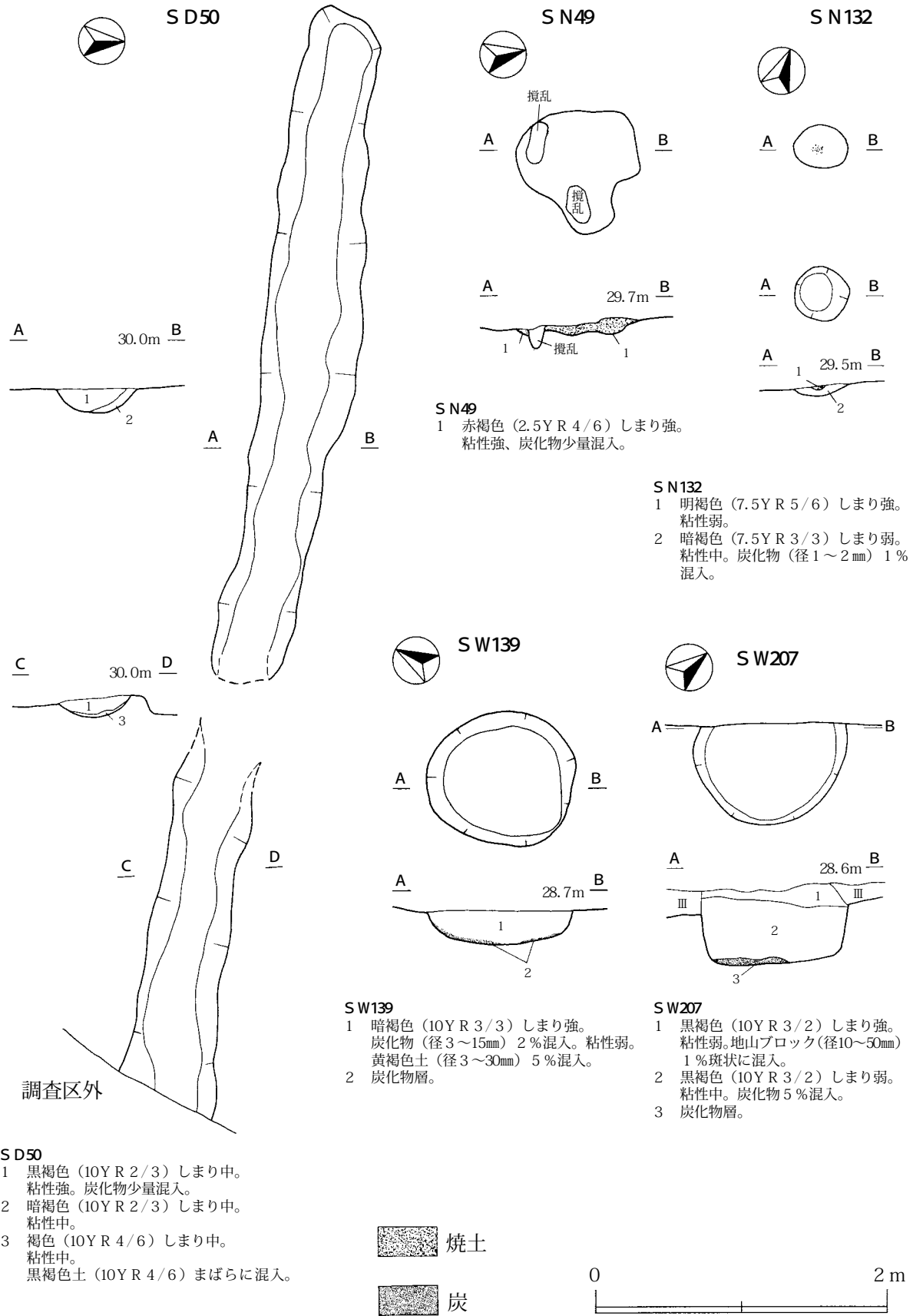
S W207 (第12図)

ML45グリッドのⅢ層で確認した。平面形は直径1mの円形を呈し、確認面からの深さは50cmである。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土の2層には多量の炭化材が含まれる。底面には基本底面には厚さ6cmの炭化物層が堆積し、底面は焼けている。本遺構の時期は覆土の堆積状況から第Ⅰ層形成期かそれ以前であると考えられる。

8 柱穴様ピット (第6・17図、第2・4表)

柱穴様ピットは、遺物が伴わないものがほとんどで時期を判別することができない。また、建物跡の柱穴配置を示すものもない。したがって、柱穴様ピットの時期は、覆土を基準にして時期を推定するにとどめたい。

覆土が暗褐色土を主体とする柱穴様ピットについては、基本層序第Ⅲ層が流入したもので縄文中期から弥生時代と思われる。覆土が黒褐色土を主体とする柱穴様ピットは、基本層序第Ⅰ・Ⅱ層が流入したもので弥生時代以降と考えられる。

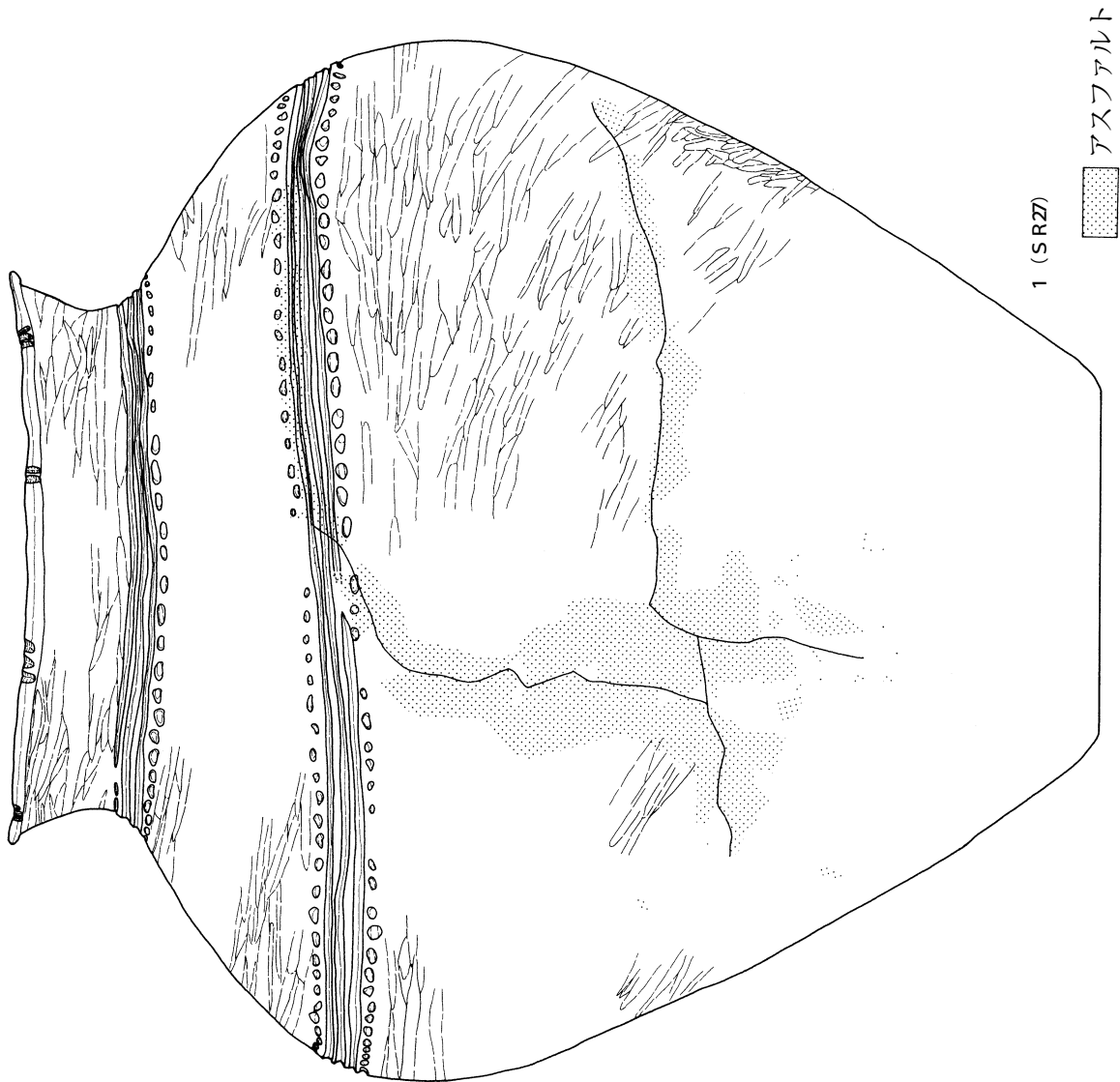
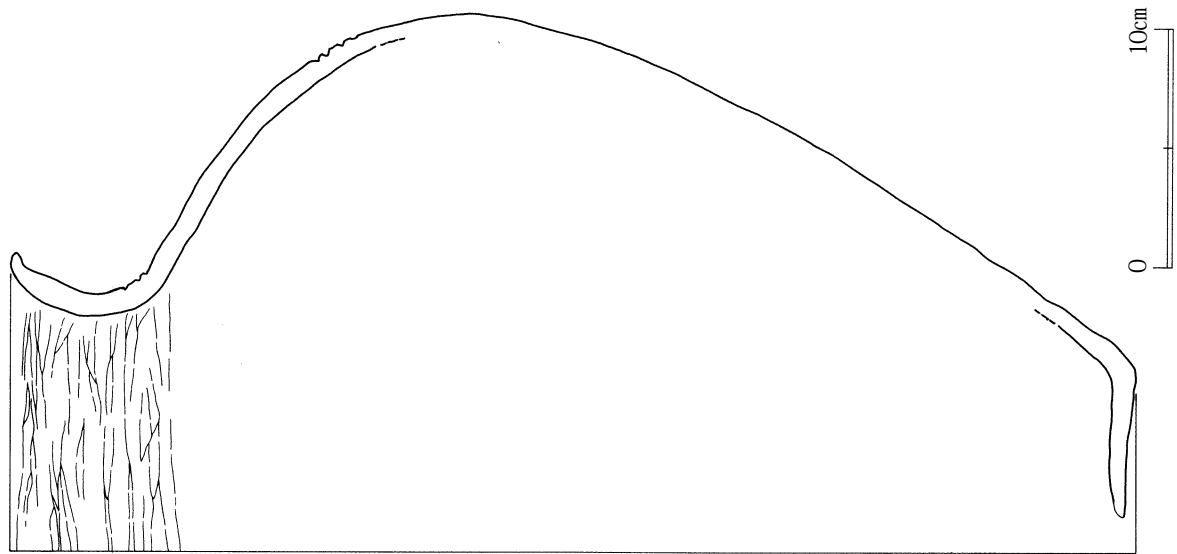


第12図 SD50溝跡、SN49・132焼土遺構、SW139・207炭窯

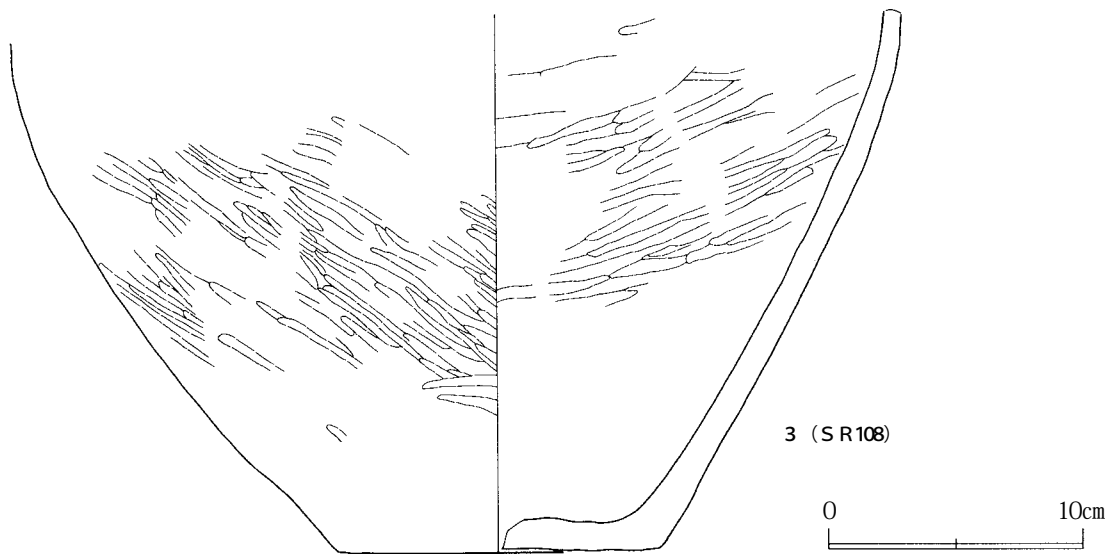
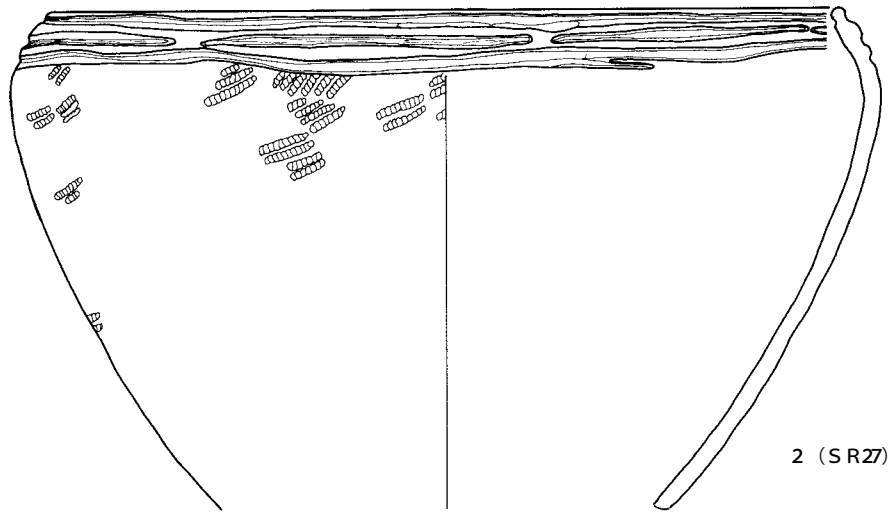
第2節 検出遺構と出土遺物

No.	位置	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高m	土色	出土遺物など
2	M B 54	橢円形	38	31	19	29.66	暗褐色	
4	M D 55	橢円形	22	13	7	29.55	暗褐色	
19	M F 57	橢円形	41	18	18	29.45	暗褐色	土器1点 剥片1点
20	M E 57	橢円形	46	35	32	29.36	暗褐色	土器3点 剥片1点
21	M E 56	橢円形	39	28	16	29.52	黒褐色	
22	M F 56	橢円形	50	31	16	28.39	黒褐色	
23	M F 23	橢円形	57	27	10	28.42	黒褐色	
103	M H 53	橢円形	44	37	32	29.2	暗褐色	(第9図)
105	M H 37	不整形	32	30	10	30.02	暗褐色	
114	M I 53	橢円形	53	44	31	29.1	暗褐色	土器(第9図)
115	M L 49	橢円形	36	32	18	28.44	暗褐色	
116	M L 49	橢円形	30	30	20	28.6	黒褐色	
117	M J 53	橢円形	28	28	24	29.12	黒褐色	
120	M I 52~M J 52	橢円形	29	28	20	29.4	黒褐色	
121	M I 52	橢円形	65	44	10	29.6	暗褐色	
122	M H 53	橢円形	18	14	14	29.12	黒褐色	
125	M L 38~MM38	橢円形	不明	24	14	28.86	黒褐色	
130	M I 51	円形	20	18	20	29.4	暗褐色	
131	M I 51	橢円形	20	20	26	29.34	暗褐色	
133	M I 49	不整形	26	23	10	29.4	黒褐色	
140	M K 37	不整形	17	16	8	30.03	暗褐色	
143	M H 37	橢円形	33	29	38	28.69	暗褐色	
147	M E 54	不整形	31	28	33	29.36	暗褐色	
148	M E 54	円形	40	40	21	29.51	暗褐色	
149	M F 53	不整形	33	31	22	29.44	暗褐色	剥片
150	M E 52	円形	32	30	28	29.43	暗褐色	
151	M E 50	橢円形	41	21	11	29.55	暗褐色	
152	M F 49	不整形	26	23	17	29.5	暗褐色	
153	M F 52	橢円形	45	30	26	29.39	暗褐色	
159	M L 39	不整形	39	39	39	28.61	暗褐色	
160	M L 39	不整形	38	39	40	28.45	黒褐色	
167	M H 44	橢円形	30	28	14	29.06	黒褐色	
168	M H 44	橢円形	24	24	18	28.94	黒褐色	
169	M H 44~45	円形	22	20	14	28.99	黒褐色	
170	M H 45	不整形	24	22	16	28.99	黒褐色	
171	M G 44	不整形	20	20	13	29.05	暗褐色	
172	M G 44	橢円形	23	19	18	28.98	暗褐色	
177	M H 44	円形	19	18	5	29.12	暗褐色	
179	M L 39	隅丸方形	36	32	29	28.52	黒褐色	
180	M J 45	円形	27	27	20	28.76	暗褐色	
181	M J 44	橢円形	36	20	11	28.63	黒褐色	
182	M J 44	円形	34	34	11	28.64	暗褐色	
183	M J 44~M K 44	不整形	28	23	10	28.77	暗褐色	
184	M I 44	不整形	28	23	11	28.63	暗褐色	
185	M J 45	長円形	90	29(残存値)	23	28.58	暗褐色	
186	M J 45	不整形	24	21	32	28.68	黒褐色	
188	M J 45	隅丸方形	31	23	27	28.7	黒褐色	
190	M K 45	不整形	37	35	28	28.66	暗褐色	
191	M K 45	不整形	26	24	22	28.6	暗褐色	
192	M K 45	橢円形	35	30	46	28.16	暗褐色	
193	M L 45	橢円形	28	24	18	28.08	黒褐色	
196	M L 46	不整形	36	28	22	28.32	暗褐色	
197	M L 47	円形	32	29	22	28.36	黒褐色	
198	M L 47	不整形	44	36	26	28.28	黒褐色	
199	M K 47	不整形	40	26	21	28.64	黒褐色	敲石(第17図22、図版10-3-22)
200	M K 45~M L 45	不整形	26	24	18	28.36	黒褐色	
201	M L 46	不整形	25	20	13	28.55	黒褐色	
202	M L 46	不整形	24	23	15	28.32	暗褐色	
203	M L 47	不整形	25	20	27	28.22	黒褐色	
204	M L 47	不整形	26	24	23	28.06	黒褐色	
205	M K 45~46	円形	24	21	15	28.66	黒褐色	
206	M L 47	不整形	29	21	20	28.32	暗褐色	
211	M I 51~M J 51	円形	23	23	27	28.41	暗褐色	

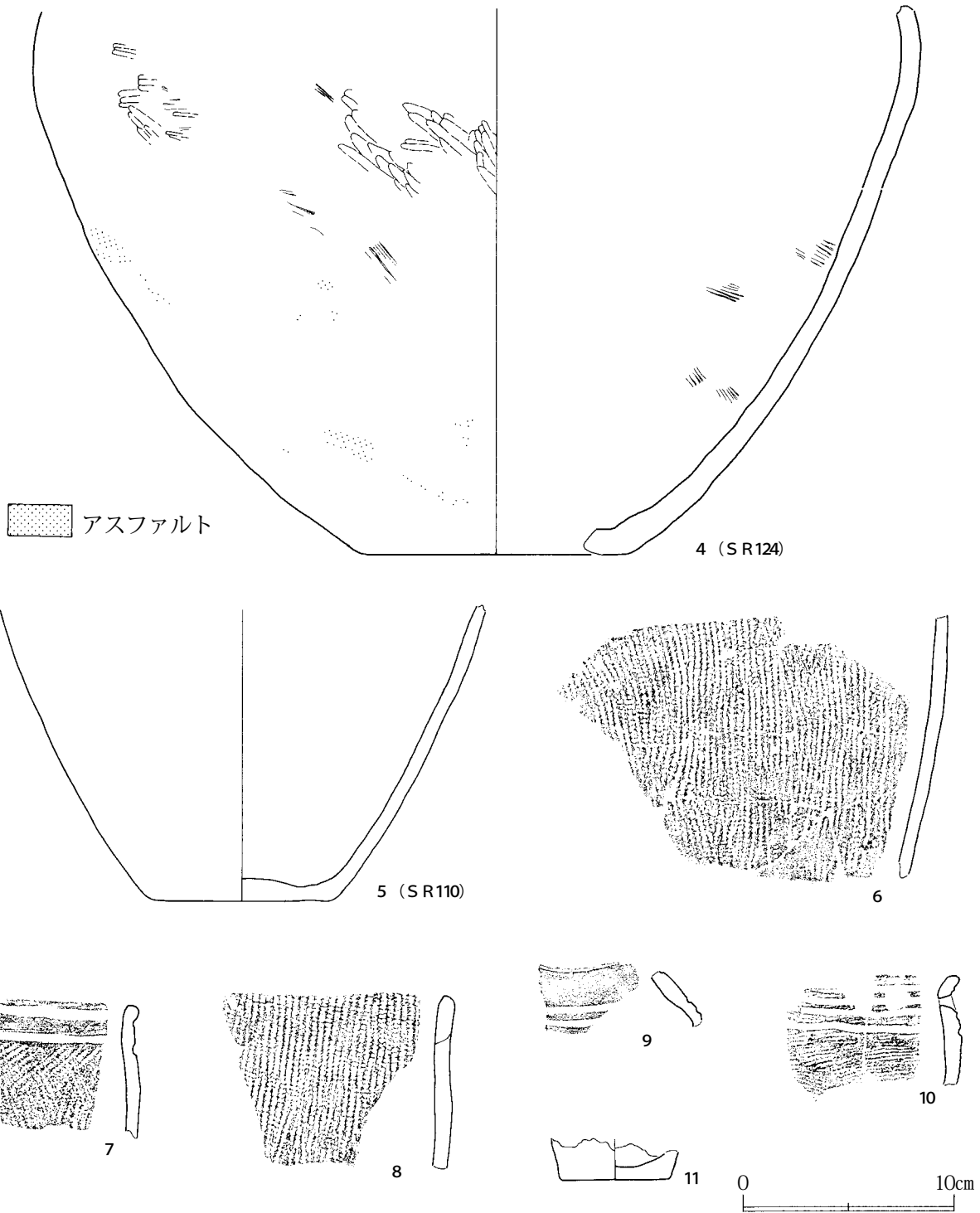
第2表 柱穴様ピット一覧



第13図 遺構内出土器(1)



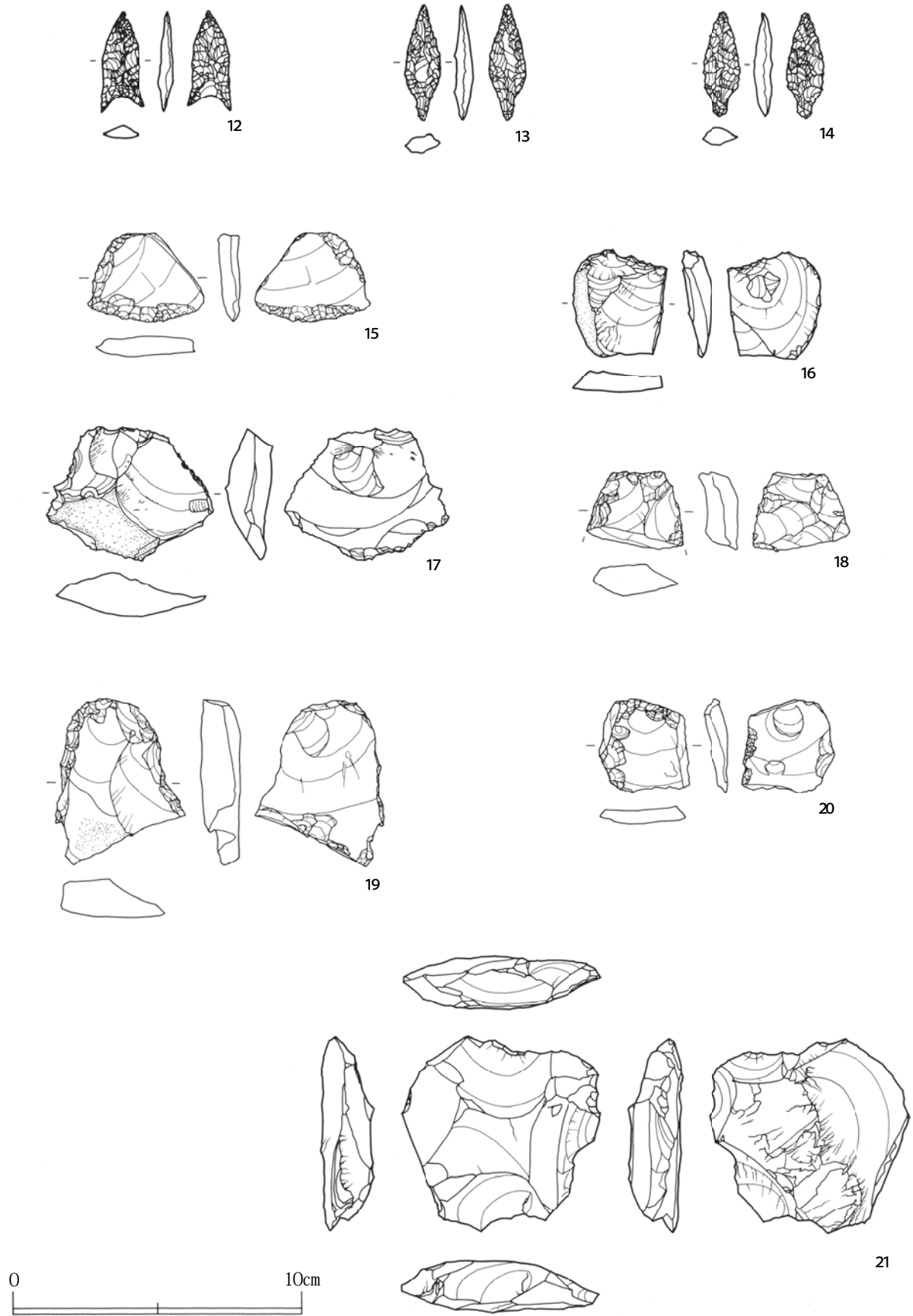
第14図 遺構内出土土器(2)



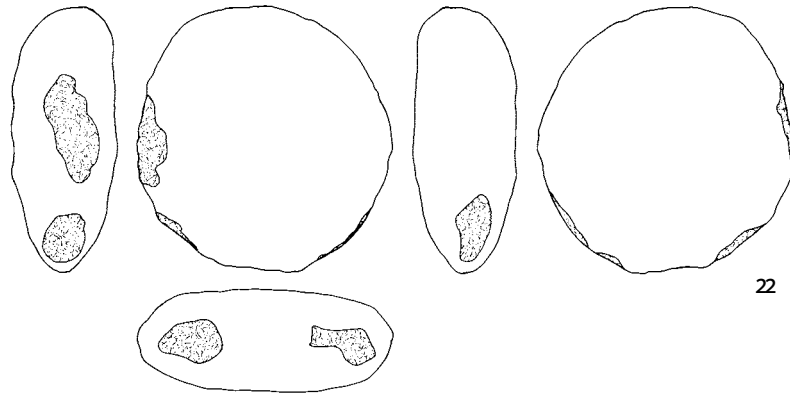
第15図 遺構内出土土器(3)

挿図番号	図版番号	区域	器種	部位	外面	内面	胎土	その他	口径×底径×高さ(cm)
15図1	8-1	S R27	壺	完形	全体にミガキ 口唇部に2~3の刻み 肩部と体部の境と肩部に3本沈線と列点文	ミガキ	緻密	外面にアスファルト補修痕 底部穿孔	24.9×15.2×47.0
15図2	9-1	S R27	鉢	口縁~体部	口縁部に3条の平行沈線 L R縦位回転	—	緻密	1の蓋として使用	31.0×—×19.7
15図3	9-2	S R108	壺	体部~底部	全体にミガキ 肩部と体部の境に平行沈線2条	ミガキ	緻密	底部穿孔	—×12.8×21.1
15図4	10-1	S R124	壺	体部~底部	全体にミガキ	ミガキ	緻密	外面にアスファルト補修痕 底部穿孔	—×12.5×25.9
15図5	9-3	S R110	深鉢	体部~底部	—	—	緻密	—	—×8.6×14.0
15図6		S K141	甗	体部	L R斜位回転	ミガキ	緻密	—	—
15図7	10-2-7	S K141	鉢	口縁部	L R斜位回転→すり消し→沈線2条	—	緻密	—	—
15図8	10-2-8	S K141	甗	口縁部	L R斜位回転	ミガキ	緻密	—	—
15図9	10-2-9	S K141	壺	体部	ミガキ→沈線2条	—	緻密	—	—
15図10	10-2-10	S K141	鉢	口縁部	L R斜位回転→沈線4条	—	緻密	—	—
15図11		S K141	鉢	底部	—	—	緻密	—	—×5.2×—

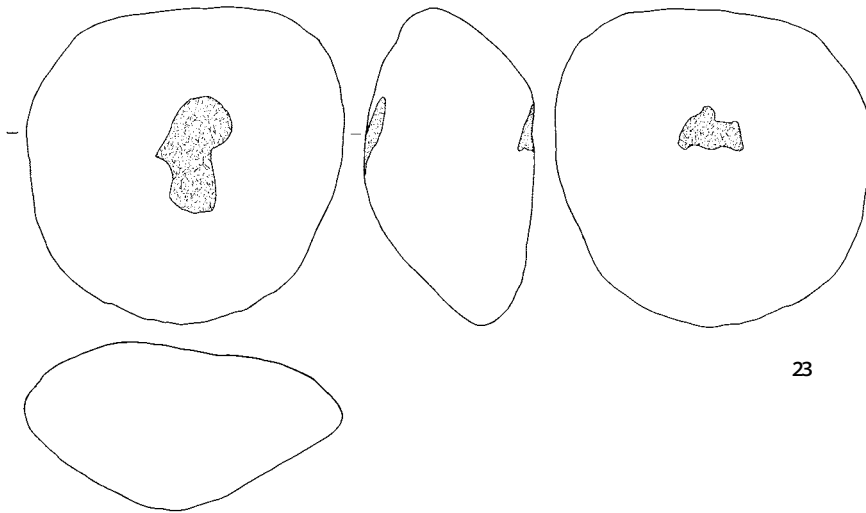
第3表 遺構内出土土器観察表



第16図 遺構内出土石器(1)



22



23

 使用痕



第17図 遺構内出土石器(2)

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	その他
16図12	10-3-12	S I 48	石鏃	3.4	1.5	0.5	1.6	
16図13	10-3-13	S K 173	石鏃	4.0	1.2	0.6	2.3	
16図14	10-3-14	S K 173	石鏃	3.6	1.3	0.6	2.0	黒曜石
16図15	10-3-15	S K 166	搔器	3.1	4.0	0.7	8.7	
16図16	—	S K 166	搔器	3.7	3.2	0.1	10.6	
16図17	10-3-17	S K 141	搔器	4.6	5.8	1.6	31.2	
16図18	—	S K 141	搔器	2.7	3.3	1.4	11.1	
16図19	10-3-19	S K 141	搔器	5.8	4.5	1.3	35.0	
16図20	—	S K 166	搔器	3.8	3.1	0.8	6.6	
16図21	—	S K F 164	石核	6.7	6.9	1.8	70.8	
17図22	10-3-22	S K P 199	敲石	7.0	6.7	2.8	158.4	
17図23	10-3-23	S K F 164	台石	8.4	8.4	4.5	200.4	

第4表 遺構内出土石器観察表

第3節 遺構外出土遺物

1 土器（第18・19図、第5・6表、図版11）

遺構外出土の土器はすべて破片である。このうち縄文時代中期の土器と弥生時代の土器が多く、ほかに縄文時代後期の土器が1点ある。縄文時代中期の土器は調査区南西側の傾斜地に多く出土した。

(1) 縄文時代の土器（第18図、第5表、図版11-1）

24～36は縄文時代中期の土器である。26は円筒上層b式の口縁部で、6条の絡条体圧痕文と半截竹管状工具による刺突文がある。24・25・27～36は体部破片である。11・24・27・30・34・36は斜縄文が施されており、24・30・36はL R原体、37はR L原体である。いずれも胎土は緻密で焼成も良好である。25・28・31・33は羽状縄文が付される土器で、25・28・33は非結束の、8は結束の羽状縄文である。

37は縄文時代後期中葉の深鉢形土器の口縁部破片である。口唇は平坦で体部上半にはL R縄文の縦位回転施文後、上下を沈線で画した無文帯がある。胎土は白色の砂粒を含み、緻密で焼成も良好である。

(2) 弥生時代の土器（第19図、第6表、図版11-2）

38～47は甕の口縁部破片である。いずれも口縁部は外反し、一度頸部で窄み、丸みのある体部上半に至る器形と考えられる。38・40・41はL R縄文施文後、頸部を磨り消して無文にしている。39は頸部の無文部に刷毛目が施される。42～44は頸部と体部上半を2条の平行沈線で画している。42はL R縄文、43・44がR L縄文である。45～47は鉢形土器である。45・46は外反する口縁から直線的に底部に至る器形と考えられ、46は、体部上半には3条の深い沈線が巡り、それに貼瘤が付される。47は外反気味の口縁からわずかに膨らみを持つ体部上半に至る器形で、体部上半には工字文風の平行沈線が描かれる。内面の体部上端にも1条の沈線が巡る。48～56は、甕または鉢形土器の体部破片で、52以外はL R縄文が施される。57は体部下端までL R縄文が施され、底部外面はほぼ平坦である。

2 石器（第20図、第7表、図版11-3）

遺構外出土の石器はMF 41・42、MG 40・41グリッド付近に多く出土した。これらは竪穴住居跡(S I 48)に関連すると思われる。

遺構外の出土石器には石鏃・石槍・石錐・石篋・搔器・鋸齒縁石器・石核・敲石がある。

石鏃58は凹基無茎鏃で、両面に先行剥離面を残している。59は断面が菱形の棒状石鏃で中央部に最大幅を持ち、両面には細かな押圧剥離が施される。

石槍61は背面に細かな押圧剥離を施す。主要剥離面には粗い押圧剥離が施され、中央部には先行剥離面を残している。

石錐60は打面を残す剥片を素材とし、打面の反対方向に刃部を設ける。

石篋62は打面方向に粗い剥離を施した刃部を設けている。基部の両面にはアスファルトが残り、着柄時の痕跡と考えられる。64は撥形の石篋で打面の反対方向に刃部が設けられる。二次調整は両側縁

第4章 調査の記録

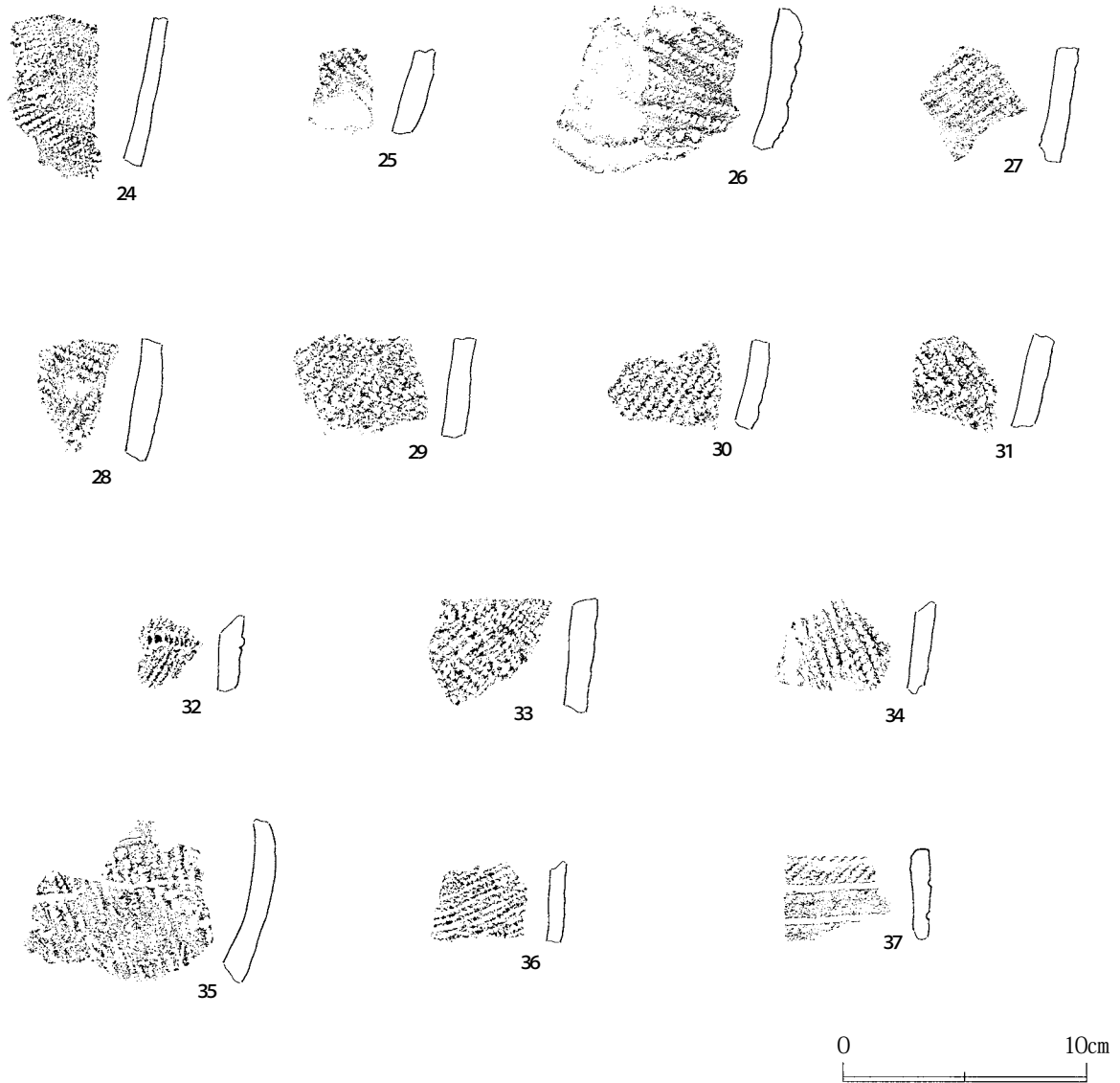
に施され、主要剥離面には広く先行剥離面が残される。

搔器63・65・66は、素材剥片の形状を変えずに剥片の側縁に二次調整によって刃部を設けている。65の刃部は急角度に作出されている。

鋸歯縁石器67は、礫皮面を残す大型剥片の片側縁に刃部を設けている。68は両面に先行剥離面を広く残し、側縁に二次調整を施している。

石核69は両極打面を持ち、およそ2cm四方の剥片を剥取している。70は礫皮面のある石核で単打面から約2cm×4cm程の剥片を剥取している。

敲石71は円礫の一端に2×4cmほどの範囲に浅い敲打痕が認められる。



第18図 遺構外出土土器(1)

挿図番号	図版番号	区 域	層位	器種	部位	外 面	内面	胎 土
18図24	11-1-24	MO42		攪乱	深鉢 体部	L R 横回転	—	緻密
18図25	—	MN38			深鉢 体部	L R 縦回転	—	緻密
18図26	11-1-26	MN38			深鉢 体部	絡条体圧痕文	ミガキ	緻密
18図27	11-1-27	MN36			深鉢 体部	R L 縦回転	—	緻密
18図28	11-1-28	MN37			深鉢 体部	非結束の羽状縄文	—	緻密
18図29	11-1-29	MO37			深鉢 体部	L R 横回転	—	緻密
18図30	—	MF 45		木根	深鉢 体部	L R 横回転	—	緻密
18図31	11-1-31	MN36			深鉢 体部	結束羽状縄文	—	緻密
18図32	11-1-32	ML 49	Ⅲ		深鉢 体部	L R 横回転隆帯→半截竹管状工具による刺突	—	1~2mm砂粒混入
18図33	11-1-33	MN37			深鉢 体部	R L 横回転→L R 横回転	ミガキ	緻密
18図34	11-1-34	MK 43		攪乱	深鉢 体部	L R 縦回転	ミガキ	緻密
18図35	11-1-35	MN37			深鉢 体部	R L 横回転→L R 横回転	—	緻密
18図36	11-1-36	MN37		攪乱	深鉢 体部	L R 異条縄文	ミガキ	緻密
18図37	—	ME 45	Ⅲ		深鉢 口縁部		—	

第5表 遺構外出土土器観察表(1)

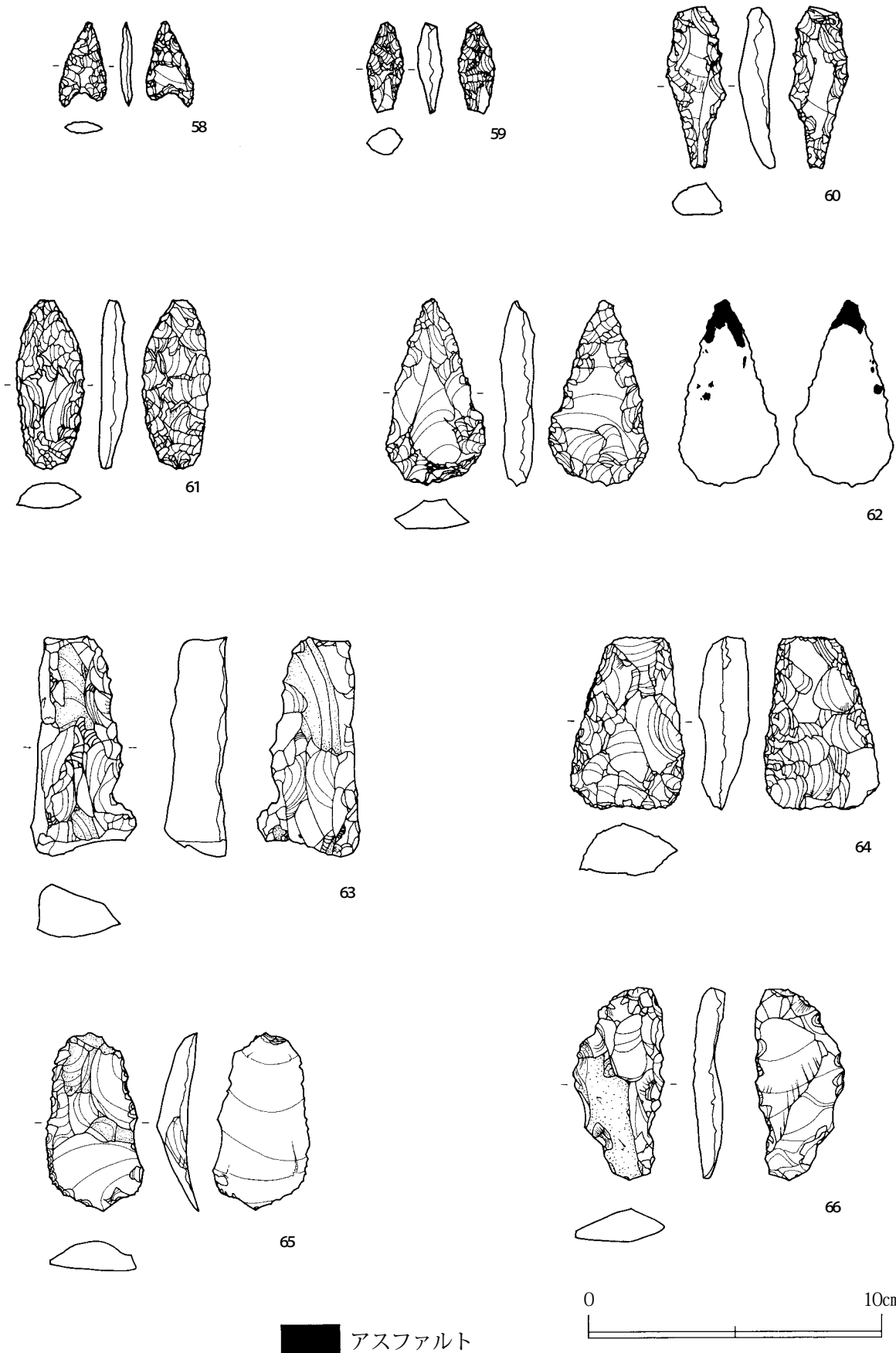
第4章 調査の記録



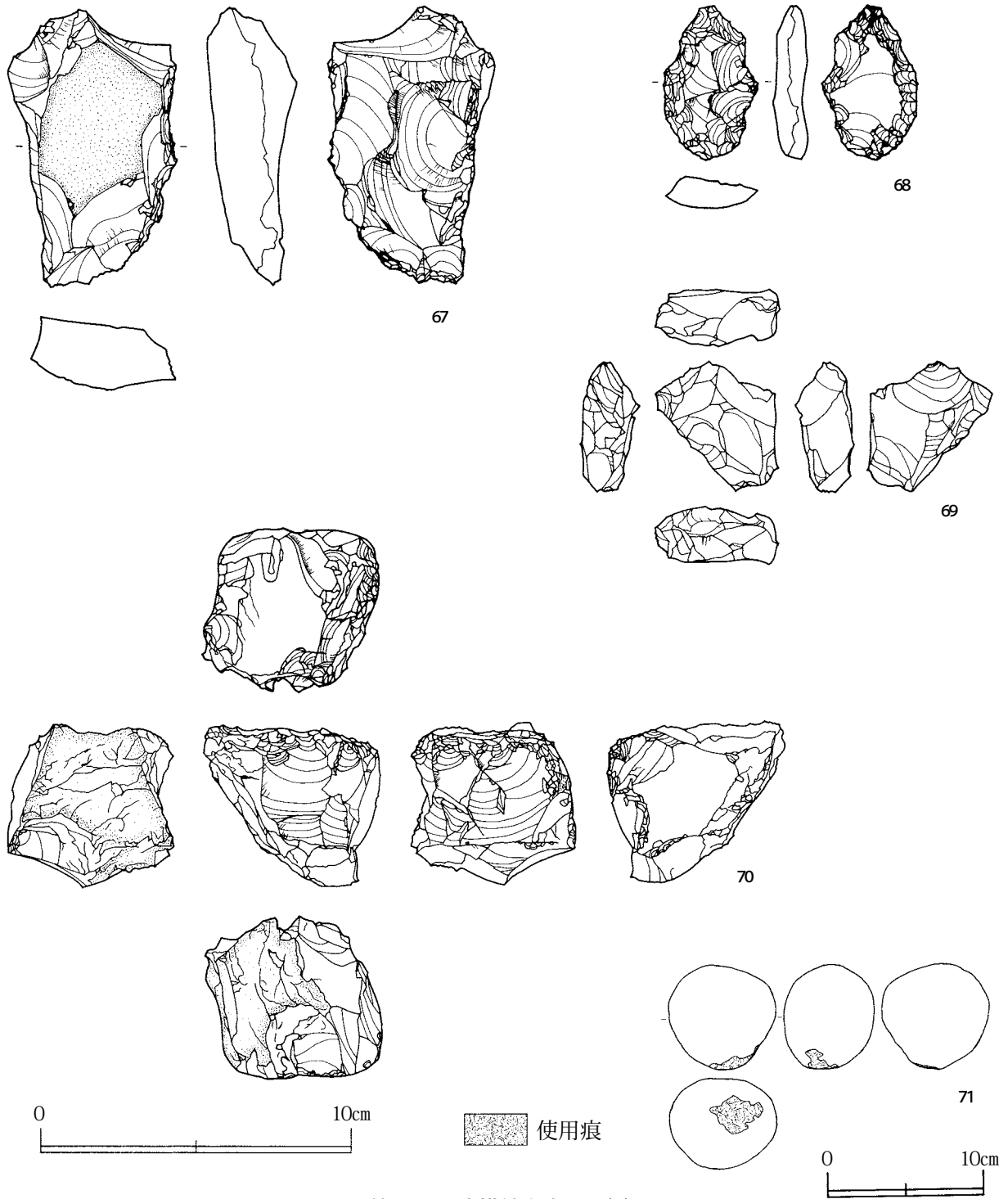
第19図 遺構外出土土器(2)

挿図番号	図版番号	区域	層位	器種	部位	外 面	内 面	胎土
19図38	11-2-38	MF 44	I	甕	口縁部	L R横回転、一部スリ消し	ハケ→ミガキ	緻密
19図39	11-2-39	MG 40		攪乱	口縁部	口縁部上端L R横回転 沈線5条 L R横回転	ミガキ	緻密
19図40	11-2-40	MH 42		甕	口縁部	口縁に沿って粘土紐貼付→L R横回転 L R横回転	—	緻密
19図41	11-2-41	MF 45	III	甕	口縁部	口縁上部無文 L R横回転	ミガキ	緻密
19図42	11-2-42	M J 46		甕	口縁部	口縁部上端L R横回転 沈線2条	—	緻密
19図43	11-2-43	MF 45		甕	口縁部	口唇部R L横回転 沈線2条 R L横回転	—	緻密
19図44	11-2-44	MF 44	III	甕	口縁部	口縁上部無文 沈線2条 L R横回転	—	緻密
19図45	11-2-45	MF 45	攪乱	鉢	口縁部	沈線2条	沈線1条	緻密
19図46	11-2-46	M J 41		鉢	口縁部	L R横回転 沈線3条 貼瘤	沈線1条	緻密
19図47	11-2-47	範囲確認		鉢	口縁部	ミガキ L R横回転 工字文沈線	ミガキ 沈線1条	緻密
19図48	11-2-48	MF 45	III	甕	体部	L R横位回転	—	緻密
19図49	11-2-49	MN 37		甕	体部	L R横位回転	—	緻密
19図50	11-2-50	M J 36		甕	体部	L R縦回転	ハケ→ミガキ	緻密
19図51	11-2-51			甕	体部	L R斜位回転	ミガキ	緻密
19図52	11-2-52	MF 44	I	甕	体部	R L横位回転	ハケ	緻密
19図53	11-2-53	MG 40	攪乱	甕	体部	L R横位回転	オサエ	緻密
19図54	11-2-54	M J 36		甕	体部	L R縦位回転→L R斜位回転	—	緻密
19図55	11-2-55	MG 40	攪乱	甕	体部	L R横位回転	—	緻密
19図56	11-2-56	MG 40	攪乱	甕	体部	L R横回転	ミガキ	緻密
19図57		MF 41	III	甕	底部	L R横回転	—	緻密

第6表 遺構外出土土器観察表(2)



第20図 遺構外出土石器(1)



第21図 遺構外出土石器(2)

挿図番号	図版番号	区域	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
20図58	11-3-58	MG 40	杉根	石鏃	2.9	1.3	0.4	1.4
20図59	11-3-59	MG 41		石鏃	3.1	1.2	0.9	2.8
20図60	11-3-60	表採		石鏃	5.5	1.7	1.1	10.1
20図61	11-3-61	M I 41	攪乱土中	石槍	5.8	2.3	1.0	12.9
20図62	11-3-62	MG 40	杉根	石鏃	6.4	3.4	1.2	21.0
20図63	11-3-63	表採		搔器	7.5	3.6	2.2	54.5
20図64	11-3-64	MG 54		石鏃	5.9	3.3	1.7	41.6
20図65	11-3-65	MO 42		搔器	6.1	3.4	1.4	16.8
20図66	11-3-66	MK 45		搔器	6.6	3.1	1.1	17.8
21図67	11-3-67	MK 40		鋸齒縁石器	8.9	4.6	2.7	118.8
21図68	11-3-68	M F 42	Ⅲ	鋸齒縁石器	4.9	3.0	1.1	15.9
21図69	11-3-69	M F 41	Ⅲ	石核	4.2	4.0	1.9	27.5
21図70		範囲確認		石核	5.1	5.6	5.3	163.6
21図71	11-3-71	M F 42	Ⅲ	敲石	6.8	6.9	5.7	200.5

第7表 遺構外出土石器観察表

第5章 自然科学分析

東飛塚館跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

秋田県山本郡山本町に所在する東飛塚館跡は、発掘調査により縄文時代・弥生時代の遺構・遺物が多数確認されている。今回の分析調査では、縄文時代の土坑と住居跡から出土した炭化材を対象に放射性炭素年代測定と炭化材同定を実施し、各遺構の年代資料を得る。また、土器埋設遺構の土器内覆土と土器周囲の土壌を対象にリン・カルシウム分析を行い、土器内の埋設物について検討する。

1. 試料

試料は、炭化材4点と土壌3点である。炭化材は、土坑S K 162覆土底部 (No.1)、土坑S K F 163覆土底部 (No.2)、土坑S K F 164覆土底部 (No.3) から各1点ずつ採取された。土壌は、土器埋設遺構とされているS R 110の土器内覆土の3層 (No.1)、S R 110の掘込土 (No.2)、S R 110底部を構成する地山 (No.3) から各1点採取された。

これらの試料のうち炭化材全3点を対象として、放射性炭素年代測定と炭化材同定を、土壌全3点を対象にリン・カルシウム分析を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。

(2) 炭化材同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) リン・カルシウム分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法でそれぞれ行った（土壌養分測定法委員会、1981）。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計により、カルシウム（CaO）濃度

を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（ P_2O_5 mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

試料番号	遺構名	試料の質	樹種	補正年代 B P	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 B P	Code.No.
No. 1	S K 162	炭化材	広葉樹	2710±40	-27.6±1.2	2750±40	I AAA -10, 354
No. 2	S K F 163	炭化材	広葉樹	2910±40	-24.2±1.1	2890±40	I AAA -10, 355
No. 3	S K F 164	炭化材	ク リ	3520±50	-25.8±1.5	3530±40	I AAA -10, 356

第8表 放射性炭素年代測定および炭化材同定結果

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第8表に示す。測定年代値（補正年代値）は、S K 162出土炭化材は約2710年前、S K F 163出土炭化材が約2910年前、S K F 164出土炭化材が約3520年前の値を示す。

なお、 $\delta^{13}C$ の値は、加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}C/^{12}C$ ）を測定し、標準試料P D B（白亜紀のベレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰：パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2) 炭化材同定

結果を第8表に示す。木材のうち、S K 162出土炭化材（No. 1）とS K F 164出土炭化材（No. 3）は、いずれも道管を有することから広葉樹材であり、S K 162出土炭化材では道管配列から散孔材と考えられる。しかし、いずれも保存状態が悪く、種類の同定には至らなかった。S K F 163出土炭化材（No. 2）は落葉広葉樹のクりに同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ク リ（*Castanea crenata Sieb et Zucc*） ブナ科ク リ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

(3) リン・カルシウム分析

分析結果を第9表に示した。対象とした試料はいずれも粘土分が多く、土性はLiC（軽埴土）に区分され、潜在的な成分保持力が低いことが予想される。一方、土色についてはいずれも10Y R 3/3と暗褐色を呈するが、発掘調査所見によればNo. 2、No. 3においてやや黒色味が淡い傾向にある。

分析結果では、リン酸含量が対照試料の地山層（No. 3）において0.74 P_2O_5 mg/g、掘込土（No. 2）では1.11 P_2O_5 mg/g、土器内覆土（No. 1）では2.28 P_2O_5 mg/gである。一方、カルシウム含量については、0.66～1.42CaOmg/gと全体的に低い値であった。

試料番号	遺構名	採取層位	土性	土色		P 205(mg/g)	CaO(mg/g)
No.1	S R 110	3層	L i c	10Y R 3/3	暗褐	2.28	1.09
No.2	S R 110	掘込土	L i c	10Y R 3/3	暗褐	1.11	1.42
No.3	S R 110	外	L i c	10Y R 3/3	暗褐	0.74	0.66

注.

(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

(2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

L i c…軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

第9表 リン・カルシウム分析結果

4. 考察

(1) 土坑の年代について

出土炭化材の測定年代値（補正年代値）はキーリ・武藤（1982）らによれば、S K 162出土炭化材とS K F 163出土炭化材は縄文時代晩期、S K F 164出土炭化材は縄文時代後期に相当する値である。よって、S K 162とS K F 163は異なる土坑だが、出土炭化材の年代値が揃う。また、近接して構築されていることから、S K 162とS K F 163はともに、約2700～2900年前に構築された可能性がある。一方、S K F 164出土炭化材の測定年代値は、S K 162・S K F 163出土炭化材よりやや古い。他の土坑と位置が離れていることを考慮すると、S K F 164は他の土坑より構築時期が古い可能性がある。ただし、炭化材の年代値は、もとなつた植物の活動が停止した年代を示すものであり、遺構の形成された年代との関係を考えなければならない。すなわち遺構周辺にあった縄文時代後期の炭化材が、縄文時代晩期以降に形成された遺構の埋積土に混入する可能性も考えられる。そのため、炭化材の年代値は、出土遺構の構築年代と必ずしも一致するとは限らない。また、燃料材などでは古材を利用していた可能性も考えられるので、注意が必要である。

今後各遺構のより詳細な年代の特定のためには、各遺構についてより多くの測定例を得ることと、測定試料の詳細な出土状況の検討など、考古学的な所見と合わせて評価することが望まれる。

(2) 土器内埋納物について

土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例があるが（Bowen、1983：Bolt・Bruggenwert、1980：川崎ほか、1991：天野ほか、1991）、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 $3.0P_2O_5mg/g$ 程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では $5.5P_2O_5mg/g$ （川崎ほか、1991）という報告例があり、当社におけるこれまでの分析調査事例では骨片などの痕跡が認められる土壌では、 $6.0P_2O_5mg/g$ を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通 $1\sim 50CaOmg/g$ （藤貫、1979）といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。

今回の分析結果では、対照試料である遺構底部を構成する地山（No.3）と比べて、掘込土（No.2）、土器内覆土（No.1）のリン酸含量が高い傾向が見られているため、動物遺体埋納の可能性があると考えられる。ただし、リン酸含量が上述の天然賦存量の範囲内にあることを考慮すれば、これらのリン

酸含量の変化は、土壌腐植の量比に起因している可能性も予想される。したがって、今回の分析により指摘した遺体埋納の可能性をより確かなものとするためには、土壌中の腐植含量を把握した上で再検討する必要がある。

引用文献

- キーリ C. T.・武藤康弘 (1982) 縄文時代の年代、「縄文文化の研究 1 縄文人とその環境」、p.246-275. 雄山閣.
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 『土壌調査ハンドブック』.156p.、博友社.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- 土壌養分測定法委員会編 (1981) 『土壌養分分析法』.440p.、養賢堂.
- 天野洋司・太田健・草場敬・中井信 (1991) 中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量.
- 農林水産省農林水産技術会議事務局編 『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』、p.28-36.
- Bowen、H. J. M. (1983) 『環境無機化学—元素の循環と生化学—』. 浅見輝男・茅野充男訳、297p.、博友社 [Bowen、H. J. M. (1979) *Environmental Chemistry of Elements*].
- Bolt、G. H.・Bruggenwert、M. G. M. (1980) 『土壌の化学』. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳、309p.、学会出版センター [Bolt、G. H. and Bruggenwert、M. G. M. (1976) *SOIL CHEMISTRY*], p.235-236.
- 川崎弘・吉田濡・井上恒久 (1991) 九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編 『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』、149p. : p.23-27.
- Stuiver、M.、Reimer、P. J.、Bard、E.、Beck、J. W.、Burr、G. S.、Hughen、K. A.、Kromer、B.、McCormac、G.、van der Plincht、J. and Spurk、M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration、24,000-0 cal B P. Radiocarbon、40、p.1041-1083.

第6章 まとめ

東飛塚館跡の検出遺構は、竪穴住居跡1軒、土器埋設遺構4基、土坑が12基、フラスコ状土坑が3基、溝跡1条、焼土遺構2基、柱穴様ピット65基である。遺物は大きなコンテナで、弥生土器3箱、縄文中期の土器0.5箱、石器2.5箱が出土した。縄文時代中期の土器は調査区南西部の傾斜地に見つかったが、この遺物が伴う遺構は検出されなかった。遺構に伴って出土した遺物は、ほとんどが弥生時代前期の遺物で、遺跡全体から広く出土した。弥生時代と考えられる遺構は竪穴住居跡（S I 48）、土器埋設遺構（S R 27・108・110・124）、土坑墓（S K 51・158・166・178）であり、これらについて以下に述べる。

竪穴住居跡 S I 48は径約10mの楕円形を呈する周溝が巡っている。住居の多くが宅地造成により失われているが、県内の弥生時代の竪穴住居跡の特徴と類似し、それから推測すると住居内の削平部分には中央の炉跡とそれを囲むように柱穴があったと思われる。

調査区の南西側に土器埋設遺構4基と土坑墓4基の墓域が確認された。S R 110を除いた土器埋設遺構は、いずれも西日本の遠賀川式土器の影響を受けた遠賀川系土器で、すべて壺形土器であった。これらの壺形土器は、正立状態で埋設されており、底部が穿孔されていた。S R 27・124はアスファルトによる補修が行われ、S R 27からは副葬品と思われる石製の玉が出土し、土器の開口部には砂沢並行期の鉢形土器が蓋として使用されていた。S R 108・110・124は最近の宅地造成のため土器の上部が失われ、蓋の存在は不明だが、地蔵田遺跡の例から考えるとS R 27と同様に蓋で覆われていたものと思われる。土器内の土を化学分析した結果、リン酸含有量は地山と比べて若干高い傾向が確認された。これらの土器埋設遺構は縄文時代からの伝統を受け継いだ在地色の強い埋葬方法で、地蔵田遺跡や館の上遺跡と同様のものであるといえよう。土器埋設遺構の周辺には、地山ブロックの混入が認められる0.8～2m程の楕円形を呈した土坑墓が検出された。地蔵田遺跡の土坑墓は、長軸方向が一定方向を意識した埋葬は行われていないことが報告されている。東飛塚館跡が地蔵田遺跡と同じタイプであるならば、長軸方向の方角は特に意識せず埋葬したものと思われる。

東飛塚館跡は、これまで発掘調査が行われた県内の遠賀川系土器出土の集落跡と明確な相違点はみられなかったが、この遺跡の調査により、これまでの遠賀川系土器出土の集落形態について認識を深める結果となった。

《参考文献》

- 秋田市教育委員会『地蔵田B遺跡』1986（昭和61）年
- 秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 坂ノ上E遺跡・湯ノ沢A遺跡・湯ノ沢C遺跡・湯ノ沢F遺跡・湯ノ沢H遺跡・野形遺跡』1984（昭和59）年
- 秋田市教育委員会『秋田臨空港新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤E遺跡・下堤F遺跡・坂ノ上F遺跡・狸崎A遺跡・湯ノ沢D遺跡・深田沢遺跡一』1985（昭和60）年
- 若美町教育委員会『横長根A遺跡一秋田県南秋田郡若美町横長根A遺跡の調査報告』1984（昭和59）年
- 秋田市『秋田市史 第六巻 考古 史料編』2002（平成14）年

第6章 まとめ

秋田県教育委員会『館の上遺跡—一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ—』秋田県文化財調査報告書第298集 2000（平成12）年

秋田県教育委員会『諏訪台C遺跡発掘調査報告書—釈迦内地区農免農道整備事業—』秋田県文化財調査報告書196集 1990（平成2）年



1. 遺跡遠景（南西から）



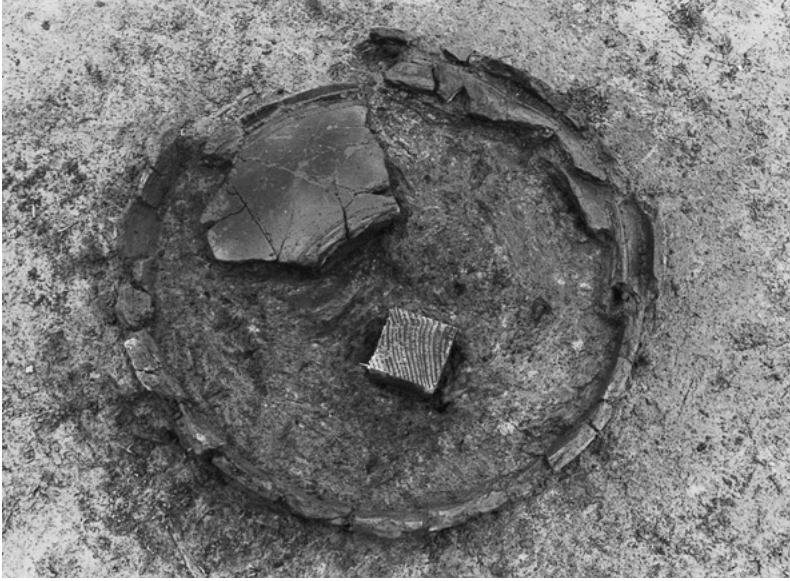
2. 平成13年度調査区全景（北東から）



1. S I 48完掘 (南東から)



2. SR27検出 (東から)



1. S R108検出
(南から)



2. S R108土層
(南から)

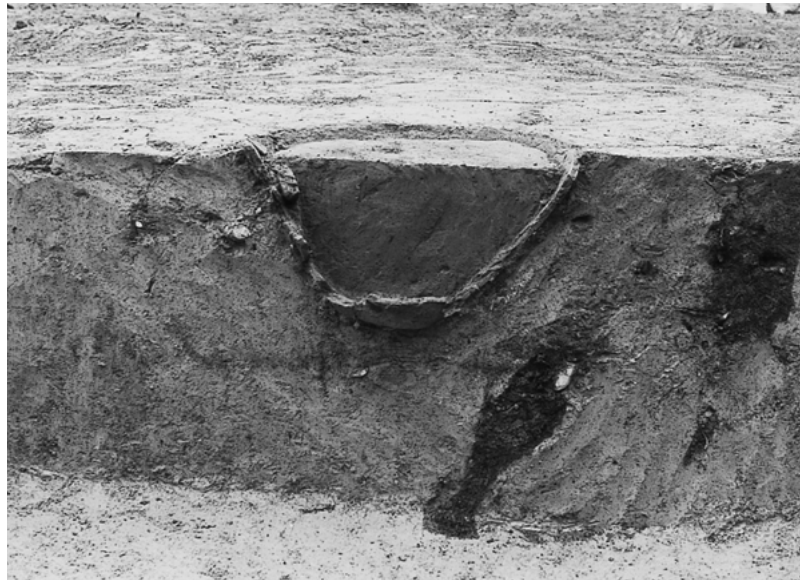


3. S R108完掘
(南から)

1. S R110検出
(南西から)

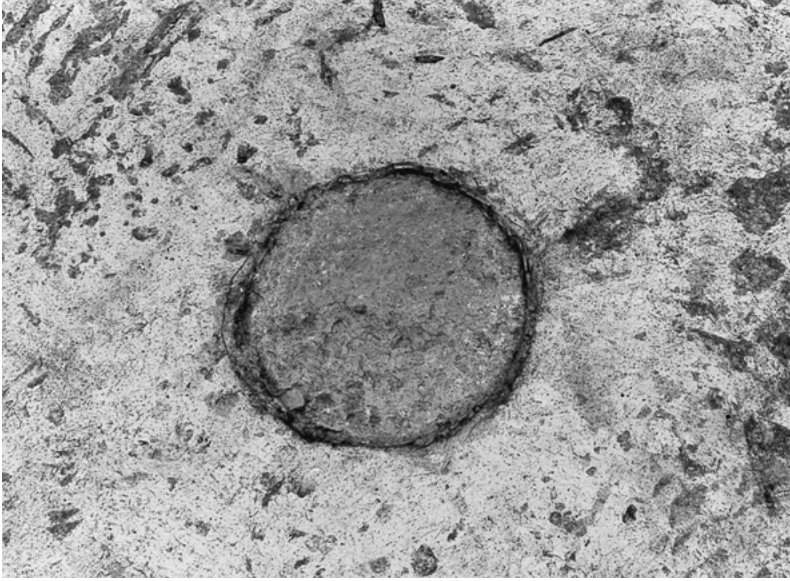


2. S R110土層
(南西から)



3. S R110完掘
(南西から)

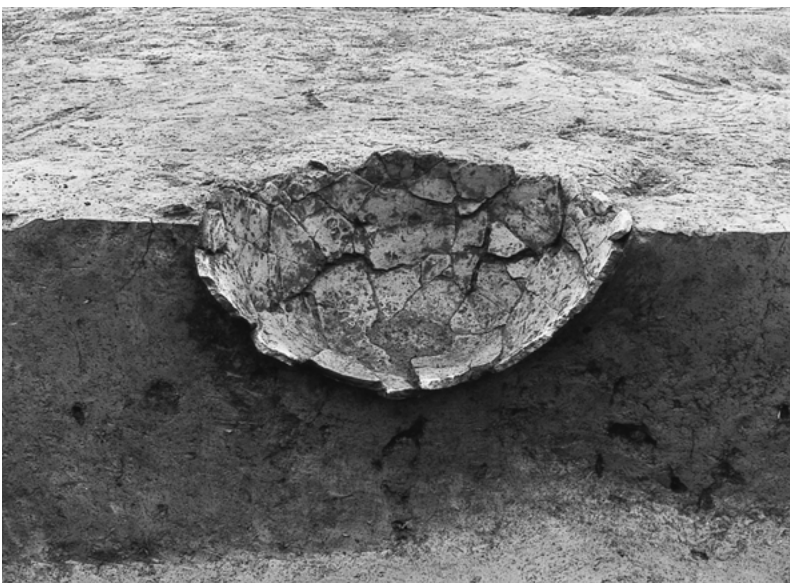




1. S R124検出
(西から)



2. S R124土層
(西から)



3. S R124完掘
(西から)



1. S K 158土層 (南から)



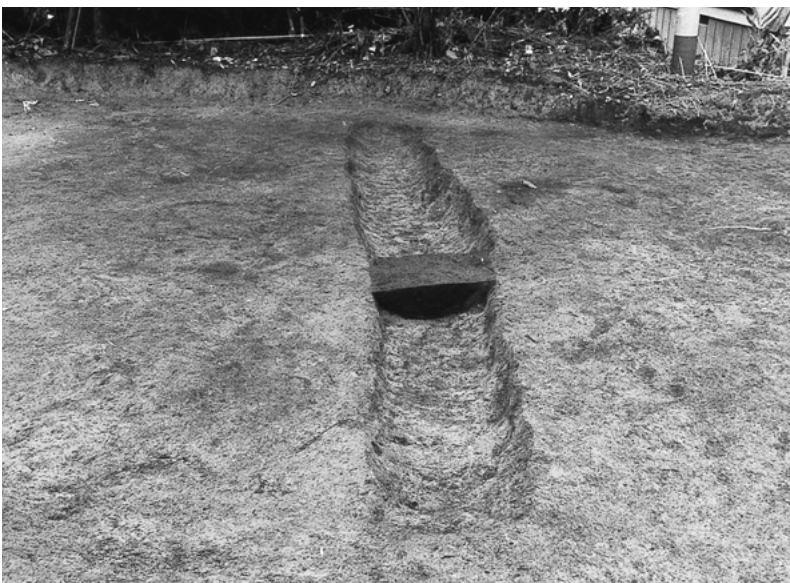
2. S K 178土層 (南から)



1. S K F163完掘
(北から)



2. S K F212土層
(東から)



3. S D50土層
(西から)



SR27出土土器 (壺)



1. S R27出土土器 (鉢)



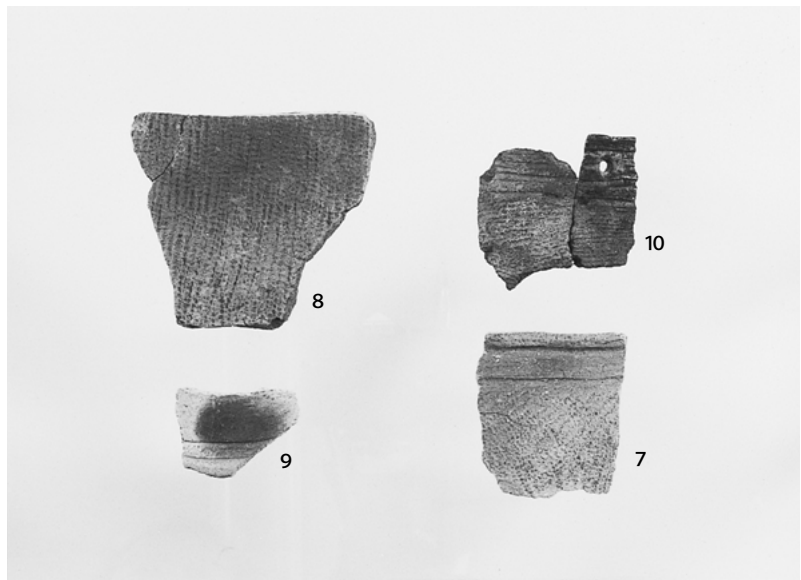
2. S R108出土土器



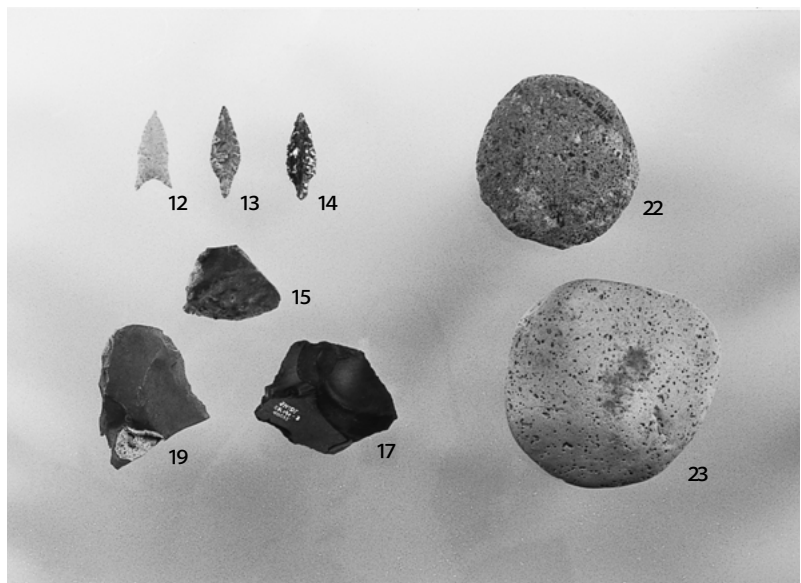
3. S R110出土土器



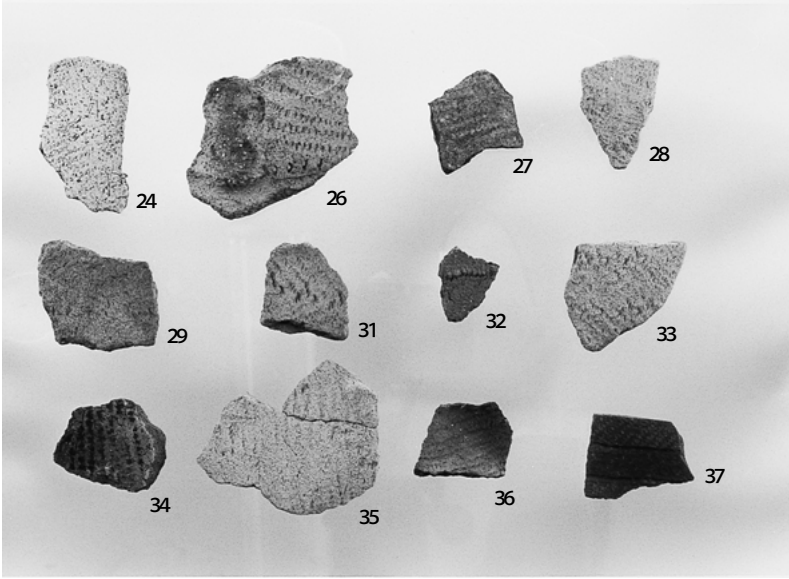
1. S R 124出土土器



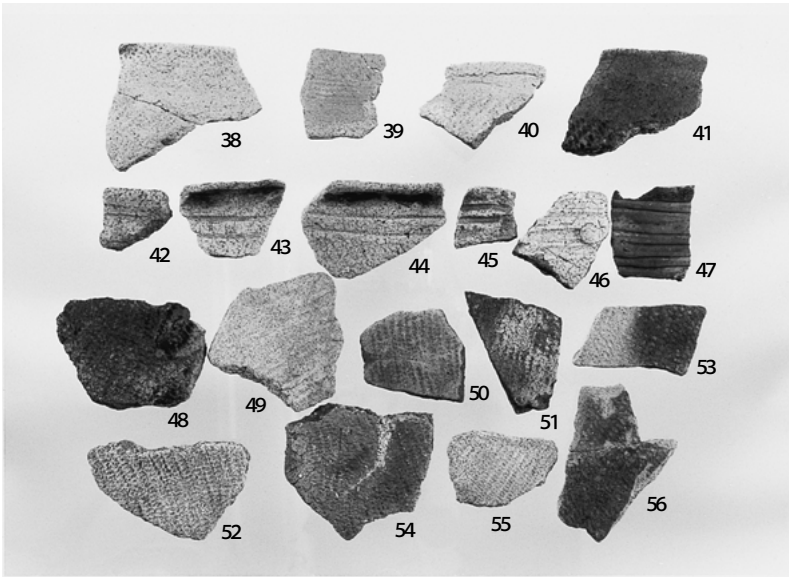
2. 遺構内出土土器



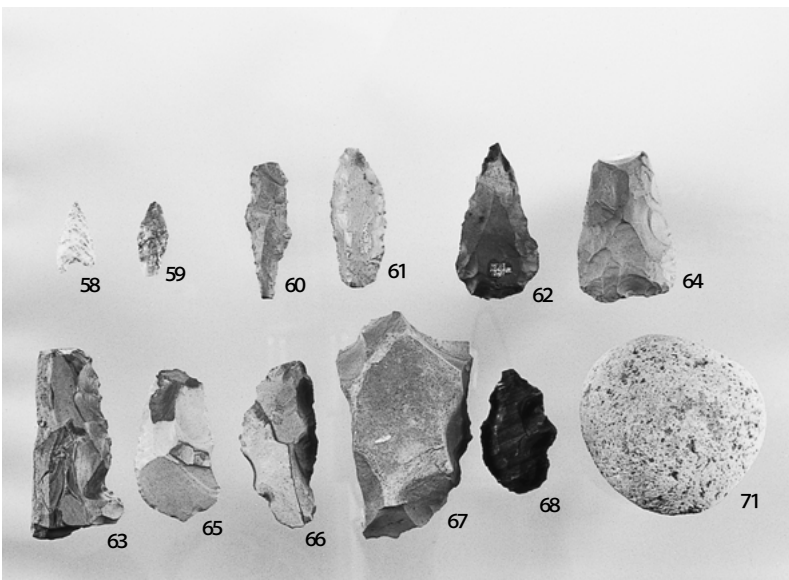
3. 遺構内出土石器



1. 遺構外出土土器(1)



2. 遺構外出土土器(2)



3. 遺構外出土石器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがしとびづかたてあと							
書名	東飛塚館跡							
副書名	主要地方道能代五城目線地方特定道路整備工事(森岳工区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第359集							
編著者名	藤田賢哉・石澤宏基							
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター							
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL0187-69-3331							
発行機関	秋田県教育委員会							
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王3丁目1番1号 TEL018-860-3193							
発行年月日	西暦2003年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしとびづかたてあと 東飛塚館跡	あきたけんやまもとぐん 秋田県山本郡 やまもとまちもりたけあざ 山本町森岳字 ひがしとびづか 東飛塚 ほか 118-1A外	05344	21-35	39度 11分 50秒	139度 55分 16秒	第1次調査 20000912 第2次調査 2001006 20010920) 20011108	第1次調査 1,100㎡ 第2次調査 2,700㎡	主要地方道能代五城目線地方特定道路整備工事(森岳工区)に係る埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ひがしとびづかたてあと 東飛塚館跡	集落跡	第1次調査 縄文時代晩期) 弥生時代前期	竪穴住居跡 1軒 土坑 2基 焼土遺構 1基 土器埋設遺構 1基 溝跡 1条 柱穴様ピット 7基 計13遺構	縄文土器 弥生土器 (遠賀川系土器等) 石器 (剥片など) 石製品(玉)		台地上に営まれた縄文時代晩期から弥生時代前期の集落跡である。竪穴住居跡・土坑・焼土遺構・土器埋設遺構が検出された。土器埋設遺構からは遠賀川系土器が出土した。		
		第2次調査 縄文時代中期 縄文時代晩期) 弥生時代前期	竪穴住居跡 1軒 土器埋設遺構 3基 土坑 8基 フラスコ状土坑 3基 焼土遺構 1基 柱穴様ピット 63基 計79遺構	縄文土器 弥生土器 (遠賀川系土器等) 石器 (石鏃・石筥など)				

秋田県文化財調査報告書第359集

東飛塚館跡

—主要地方道能代五城目線地方特定道路整備工事
(森岳工区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷・発行	平成15年3月
編 集	秋田県埋蔵文化財センター 〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330
発 行	秋田県教育委員会 〒010-8580 秋田市山王4丁目1番2号 電話(018)860-5193 FAX(018)860-5886
印 刷	秋田協同印刷株式会社

